

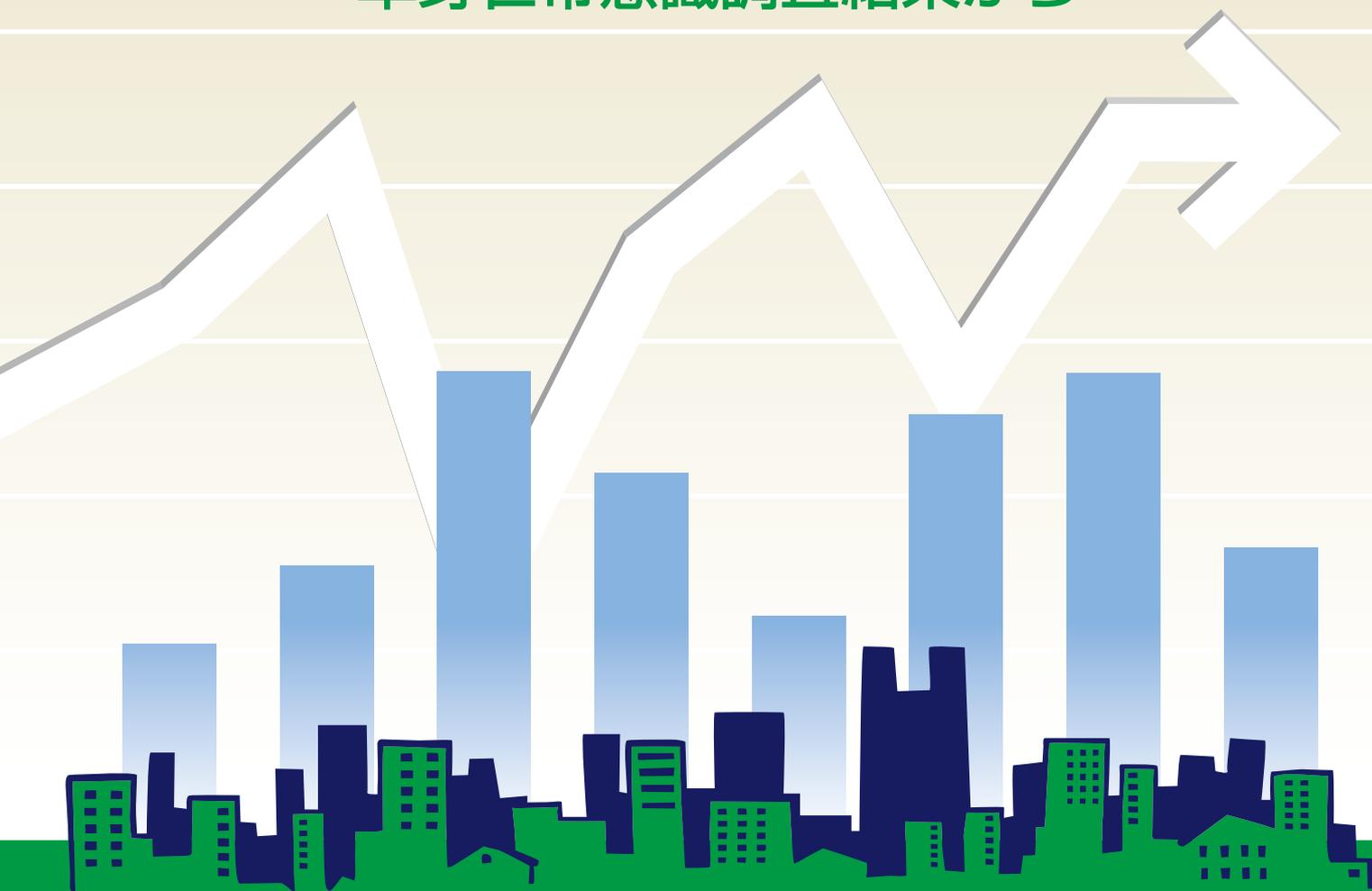
研究所レポート

2014

No.2

新宿区の単身世帯の特徴(2)

— 単身世帯意識調査結果から —



2015(平成27)年3月 新宿区新宿自治創造研究所

I	はじめに	2
	1. 研究所レポート 2013 の意識調査結果	3
	2. 本レポートのめざすところ	3
	3. 単身化・未婚化の現状	4
II	単身世帯意識調査結果	6
	1. 意識調査結果の概要	6
	(1) 調査方法	6
	(2) 回答者の概要	6
	(3) 調査項目	7
	2. 意識調査結果の分析	8
	(1) 回答者の基礎情報	8
	(2) 新宿区に住むまでの経緯	10
	(3) 一人暮らしの良い点・困った点	11
	(4) 新宿区の暮らしやすさ	12
	(5) 居住意向	13
	(6) 暮らしと意識	14
	(7) 食生活・健康状態	16
	(8) 家族とのつながり	18
	(9) 近所や地域とのつながり	19
	(10) 友人・相談相手	20
	(11) 病気や要介護時に世話をしてくれる人	22
	(12) 結婚	24
	(13) 高齢期への備え	26
	(14) 高齢期の生活	28
	(15) 区政への要望	29
	(16) 自由意見	30
III	分析結果のまとめ	35
	1. 男女・年齢区分別単身者の特徴	35
	2. おわりに — 分析を通して —	38



I はじめに

新宿区は単身世帯が非常に多い。新宿自治創造研究所が昨年度算出した将来世帯推計¹⁾においても、単身世帯は今後とも増え続けることが見込まれる。2010年国勢調査結果によると、新宿区の一般世帯に占める単身世帯の割合は62.6%で、23区で最も高く、全国の市区町村の中でも諸島部を除いて最も高い(表1)。全国割合(32.4%)のほぼ2倍である。

事業所や商業施設が集積し、交通の便が良く、大学や専門学校等が多い新宿区は、従来から若者を中心に単身者が多いまちである。しかし、若年期だけでなく、壮年期、高齢期においても単身者は増加し続けている。また、65歳以上の高齢単身世帯(者)の65歳以上人口に対する割合は35.1%²⁾で、全国割合(16.9%)の2倍以上である。2035年には44.3%にまで高くなるが見込まれている。

一人暮らしは、周りから干渉されずに自由気ままに過ごせる反面、一緒に暮らす人がいないため、病気や困りごとがあったときに誰かの支援を受けられずに孤立してしまう可能性がある。世帯の単身化が特殊な状況でなく、一般的な状況になりつつある新宿区においては、他の自治体に先立って単身化の実態を把握し、単身化がもたらす課題に的確に対応するための準備をし、新たな取り組みの方向性を考えていくことが求められる。

こうしたことから、新宿自治創造研究所では昨年度、新宿区の単身世帯の全体的な姿を示すとともに、新宿区で暮らす単身者の特徴について壮年期を中心に明らかにすることを目的に調査研究を行い、その分析結果を研究所レポート2013 No.3「新宿区の単身世帯の特徴－壮年期を中心として－」にまとめ発行した。

図1 単身世帯の推移と推計値(新宿区・全国)(1990～2035年)

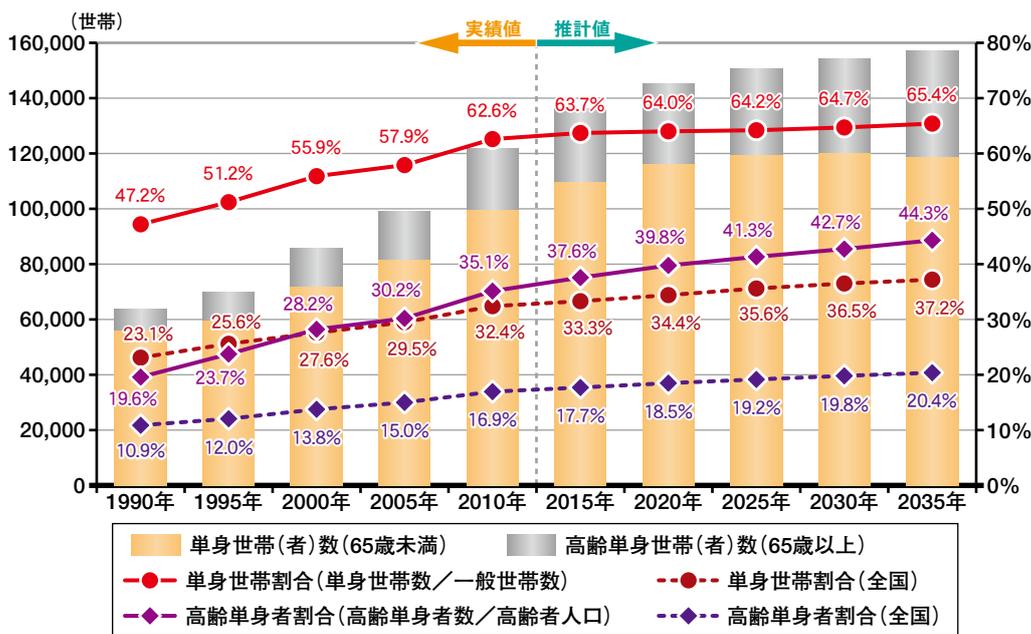


表1 単身世帯割合 (全国上位10市区町村)

1	東京都青ヶ島村	67.2%
2	新宿区	62.6%
3	渋谷区	62.5%
4	沖縄県北大東村	61.6%
5	豊島区	60.9%
6	東京都御蔵島村	60.6%
7	中野区	60.2%
8	鹿児島県十島村	58.7%
9	沖縄県渡嘉敷村	57.9%
10	鹿児島県三島村	57.9%
特別区部		49.1%
全国		32.4%

※単身世帯数/一般世帯数 (2010年国勢調査)

表2 高齢単身者割合 (全国上位10市区町村)

1	東京都青ヶ島村	57.1%
2	東京都御蔵島村	45.8%
3	鹿児島県十島村	38.6%
4	東京都小笠原村	37.9%
5	東京都三宅村	35.7%
6	新宿区	34.5%
7	鹿児島県宇検村	34.4%
8	渋谷区	33.7%
9	杉並区	33.4%
10	豊島区	33.1%
特別区部		26.8%
全国		17.4%

※65歳以上単身世帯(者)数 / 65歳以上一般世帯人員

表3 未婚率

男性		女性			
1	新宿区	50.0%	1	新宿区	42.3%
2	豊島区	46.9%	2	渋谷区	41.3%
3	中野区	46.8%	3	豊島区	38.8%
4	渋谷区	43.9%	4	中野区	38.6%
5	台東区	43.5%	5	文京区	37.8%
6	小金井市	43.0%	6	目黒区	36.8%
7	沖縄県金武町	42.9%	7	中央区	36.7%
8	文京区	42.5%	8	杉並区	36.4%
9	沖縄県恩納村	42.2%	9	武蔵野市	36.2%
10	武蔵野市	42.1%	10	千代田区	35.9%
特別区部		39.8%	特別区部		32.5%
全国		31.9%	全国		23.3%

※15歳以上の未婚者数 / 15歳以上人口(2010年国勢調査)

1) 新宿区新宿自治創造研究所(2014)「研究所レポート2013 No.2 国勢調査に基づく新宿区将来世帯推計」なお、全国推計値は、国立社会保障・人口問題研究所(2013)「日本の世帯数の将来推計(全国推計)(平成25年1月推計)」より。
2) 65歳以上人口には年齢不詳を按分して算入している。表2の高齢単身者割合は年齢不詳を按分せず、分母も異なるため、数値は一致しない。

1. 研究所レポート 2013 の意識調査結果

研究所レポート 2013 は、①統計データ分析、②意識調査結果分析、③ヒアリング調査結果分析、④分析結果のまとめの 4 章で構成されている。意識調査結果は新宿区が毎年行っている新宿区区民意識調査の中に「新宿区での暮らしと人とのつながり」をテーマにした設問を設け、その結果を基に単身者と同居人がい

る人とで比較分析したものである。ヒアリング調査は、ふだん行政との関わりが薄い壮年期の単身者の生活と意識の実態に触れることを目的に行った。

このうち、意識調査結果の分析を通して、次のとおり、新宿区の単身者の大まかな特徴が明らかになった。

- ①新宿区の単身者は、仕事や通勤・通学事情をきっかけに新宿区に転入する人が多く、東京圏外の出身者が多い。
- ②新宿区の暮らしやすさは、「通勤・通学など交通の便の良さ」を指摘する人が非常に多く、「買い物の便利さ」、「医療機関の充実」、「飲食店・娯楽施設の充実」なども多い。
- ③家族と同居していない単身者は、自由時間に友人と交流したり、一人で気ままに過ごす人が多い。同居人がいる人と比べて健康状態は特に壮年期の男性であまりよくない傾向がみられる。
- ④親しくしている家族や親戚がいない単身者は壮年期が目立つ。悩みごとは年齢層を問わず友人・知人に相談する人が多い。
- ⑤入院時や要介護時に世話をしてもらえる人は、若年期では親、壮年期では兄弟・姉妹、高齢期では子どもが最も多いが、壮年期では「いない」、「わからない」という人が多い。
- ⑥近所づきあいは、「あいさつをかわす程度」が多く、地域の団体や活動にはほとんど参加していない。
- ⑦未婚理由は、男性は「収入面の不安」、女性は「適当な相手にめぐり合わないから」という人が多い。また、全国と比べて結婚の意向が低く、未婚男性の 3 割、未婚女性の 2 割が「結婚するつもりはない」と回答している。結婚の意向がない人は、「自由さや気楽さを失いたくない」、「結婚する必要がないから」を理由に挙げる人が多い。

そして、レポートでは「今の壮年期の単身者は結婚していない人が多く、人とのつながりが少ない傾向が特に男性にみられるが、こうした壮年期の単身

者がやがて高齢期を迎えることで、いざという時に支援を得られない孤立した高齢者になっていくことが懸念される。」と指摘している。

2. 本レポートのめざすところ

研究所レポート 2013 により、新宿区に住む単身者の一定の特徴を明らかにすることができた。しかし、区民意識調査は 18 歳以上から無作為抽出した区民を対象としたものであり、単身者に特化した設問をすることができず、また、単身者から得られた回答数が少ない（若年期 54 人、壮年期 123 人、高齢期 76 人）ため、男女別分析やクロス集計をするには至らなかった。ヒアリング調査も、回答数が十分ではなかったため、タイプ別の分析ができなかった。そのため、本年度は、より詳細で多角的な分析ができるよう、調査対象者の規模を拡大し、単身者に特化した意識調査とヒアリング調査を実施することとした。

調査の対象者であるが、新宿区は従来から大学等への入学や就職を契機に多くの若者が転入してきている。彼らの多くは未婚者であり、居住期間は短く、

流動性が高い。健康状態の悪化等による一人暮らしの困難さを抱えたり、社会的に孤立する可能性の高いのは主に高齢期の単身者である。そして、単身者割合や未婚率が高く、やがて高齢期を迎える壮年期の単身者も、将来、社会的に孤立するリスクを抱えている。そのため、今年度は 35 歳以上の壮年期と 65 歳以上の高齢期の単身者を対象に、生活と意識の実態を把握するための調査を行い、男女・年齢区分別の比較分析を行うものである。

なお、今年度は 106 人の壮年期・高齢期の単身者を対象とするヒアリング調査を実施したが、本レポートでは意識調査結果の分析を中心に示すこととし、ヒアリング調査結果は、意識調査結果の分析を踏まえた上で改めて分析することとし、来年度発行する研究所レポートでその結果を報告する。

3. 単身化・未婚化の現状

前述のとおり、新宿区の単身世帯割合は62.6% (2010年)で、諸島部を除き全国で最も高い。図2は20歳以上人口を4つの年齢区分別に新宿区の単身者数と、全国を加えた単身者割合(年齢別人口に

対する単身者の割合)の推移を示したものである。図3は同様に、未婚者数と未婚率の推移を示したものである。単身者割合、未婚率ともに全ての男女・各年齢区分で上昇していることがわかる。

図2 男女・年齢4区分別単身者の推移(1990～2010年)(国勢調査)

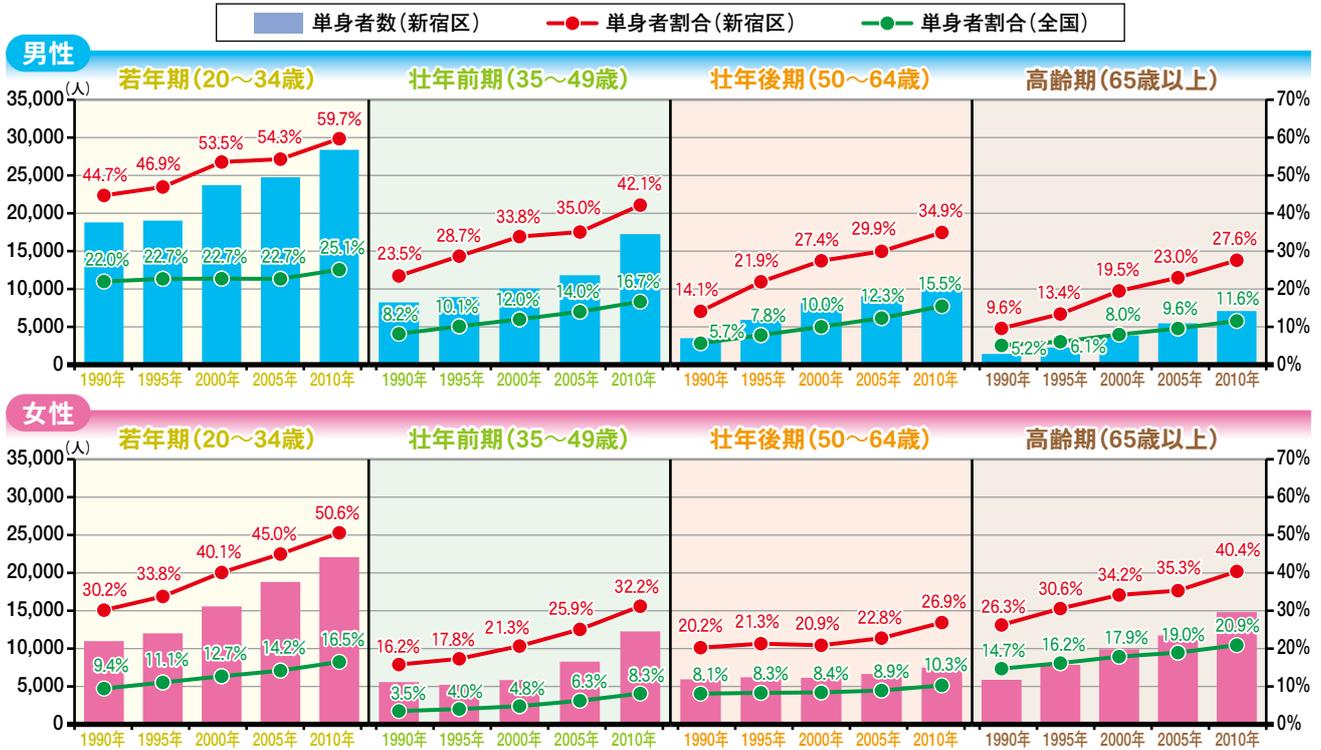


図3 男女・年齢4区分別未婚者の推移(1990～2010年)(国勢調査)

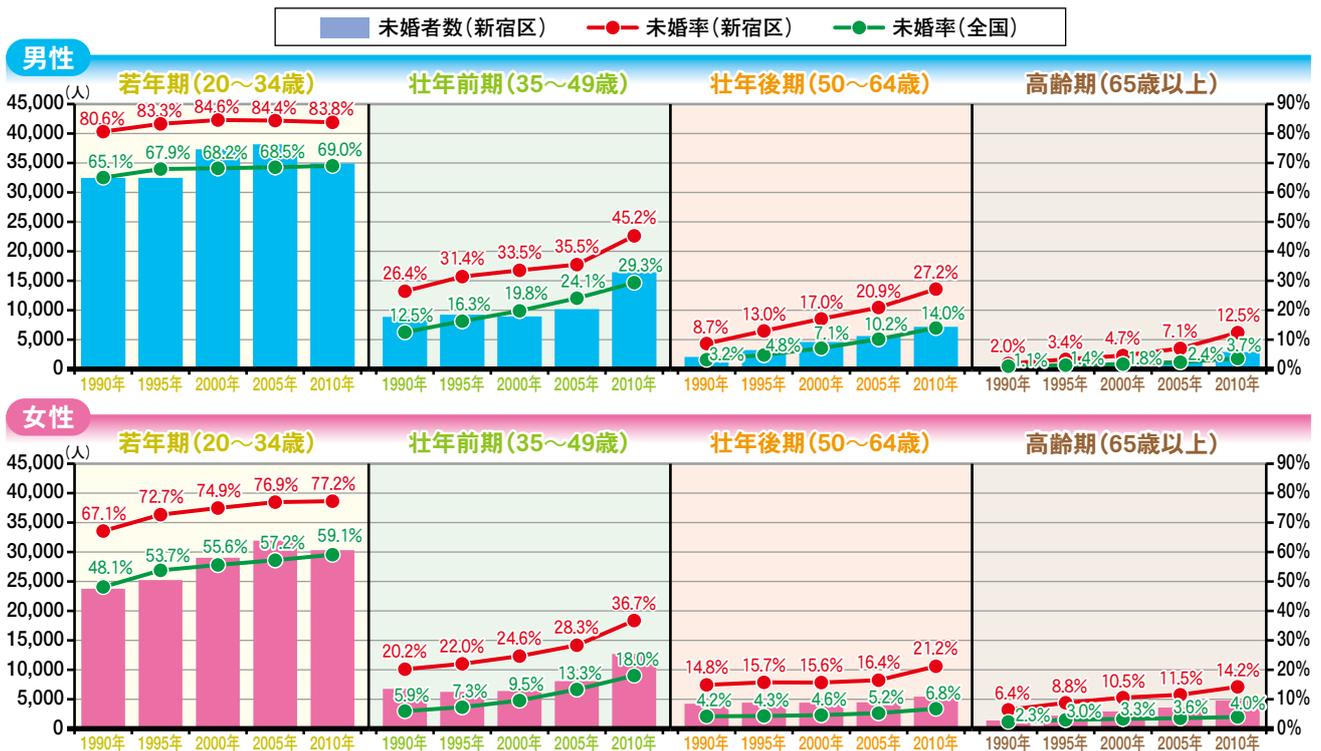


図4は、新宿区の単身者を男女・年齢4区分別に配偶関係割合をみたものである。総数では、単身男性の8割超、単身女性の7割超が未婚者で、高年

齢ほど死別の割合が高い。特に高齢期の女性は5割半ばが死別者であり、子どもがいる人が多いことが推測される。

図4 単身者の年齢4区分別配偶関係割合(2010年国勢調査)

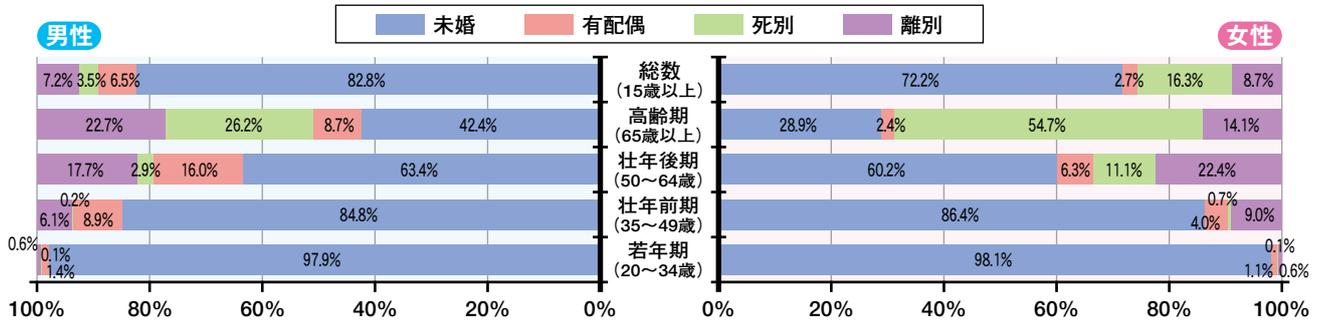


図5は、統計分析用の個票データ³⁾を用い、2014年1月1日現在の住民基本台帳人口の新宿区に転入する前の居住地(国内に限る)を単身世帯と複数人員世帯ごとに人数割合を示したものである。単身世帯は複数人員世帯と比べ、首都圏外の「その他の道府県」から転入している人が多いことがわかる。

数割合を示したものである。単身世帯は複数人員世帯と比べ、居住期間が短く、総数では1年未満は2割、3年未満(1年未満と1~3年未満の計)は4割超である。しかし、年齢区分が高くなるほど居住期間は長くなる傾向にあり、3年未満は若年期の7割超から壮年前期3割超、壮年後期2割近く、高齢期は1割未満と少なくなり、定住化の傾向が強まる。

図6は、図5と同様のデータから新宿区内での居住期間について単身世帯と複数人員世帯ごとに人

図5 世帯規模別転入元地域

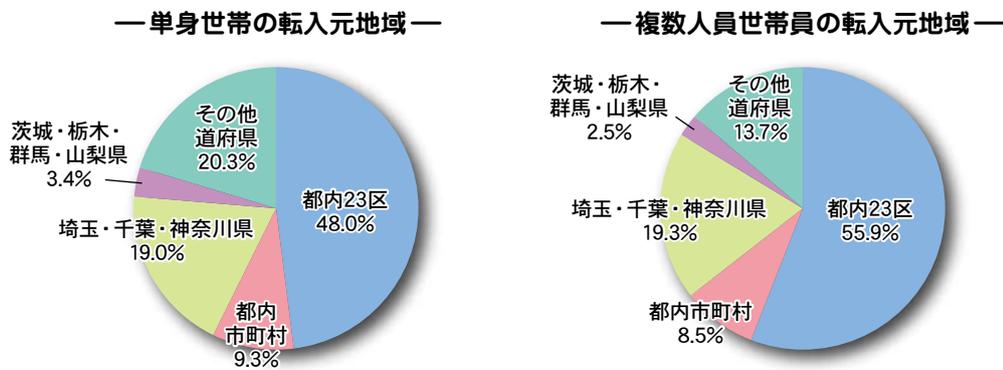
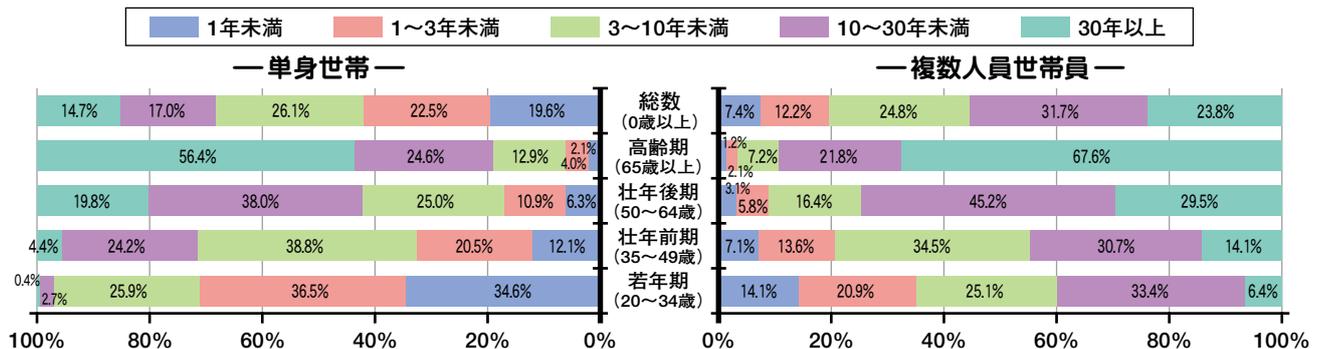


図6 世帯規模別・年齢4区分別居住(区民)期間(2014年1月1日現在)



3) 詳細は、新宿区新宿自治創造研究所(2015)「研究所レポート2014 No.1 新宿区の人口移動」を参照

II

単身世帯意識調査結果

1. 意識調査結果の概要

昨年度、18歳以上の区民を対象とする新宿区区民意識調査の中に「新宿区での暮らしと人とのつながり」をテーマとする設問を設けて調査を行い、その結果を基に単身者と同居人がいる人とで比較分析を行い、分析結果を「研究所レポート2013 No.3 新宿区の単身世帯の特徴」にまとめた。新宿区の単身者の特徴や個々の単身者が抱える問題の大枠を見ることができたといえよう。

今年度は、一人暮らしゆえに現在、健康や生活上の問題を抱えている可能性の高い高齢期（65歳以上）と、非婚のまま今後、高齢期を迎える可能性の高い壮年期（35～64歳）の単身者を対象に、生活や意識の実態に関するより詳細な調査を行うこととした。

調査の対象は、新宿区に居住する単身者2,500人で、「居住」、「人や地域とのつながり」、「日常生活」、「高齢期への意識（壮年期）」、「結婚」、「区政への要望」などを調査した。集計結果は「新宿区単身世帯意識調査—集計結果—」にまとめている。本レポートではその特徴を男女・年齢区分別に比較分析することを主眼に、必要に応じてクロス集計を行い、テーマごとに特徴となるポイントを抽出している。また、「高齢期への備え」のテーマでは、内閣府が実施した全国調査結果（※）と比較分析を行っている。調査方法、回収率、回答者の概要、調査項目は以下のとおりである。

(1) 調査方法

住民基本台帳※から無作為抽出した新宿区在住の満35歳以上の単身者（一人世帯）の男女2,500人を対象に、平成26年8月29日から9月11日にかけて郵送配布・郵送回収法による調査を実施。有効回収数は891人、回収率は35.6%（壮年期：31.3%、高齢期：44.9%）

※外国人は永住者および特別永住者

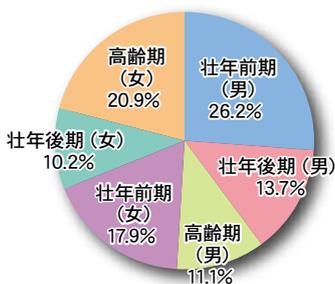
(2) 回答者の概要

回答者

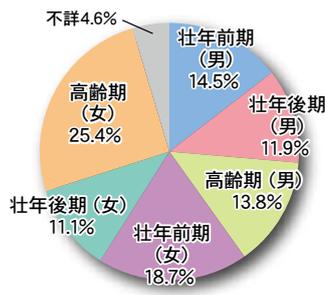
年齢区分	男女計	男	女
総数	891人	358人	492人
壮年期(35～64歳)※1	532人	235人	266人
前期(35～49歳)※2	297人	129人	167人
後期(50～64歳)	205人	106人	99人
高齢期(65歳以上)※3	359人	123人	226人

※1：壮年期のうち、男女不詳が31人あり
 ※2：壮年前期のうち、男女不詳が1人あり
 ※3：高齢期のうち、男女不詳が10人あり

— 標本（構成割合） —



— 回答（構成割合） —



グラフの見方

- 複数回答は棒グラフで示しており、総数において割合の高い順に左から並べ、「その他」「特になし」等は右側に並べている。また、回答数が少ないためグラフ上省略している選択肢もある。
- 特定の解答をした人のみに聞いている設問があり、n（＝回答者数）が一致しない場合がある。
- クロス集計においては、無回答を除いて割合を算出している。

数値をコメントする際、基本的に次の表現方法を用いた。（総括的なコメントでは別の表現を使用）

例	表現
79.5～80.4%	8割
80.5～80.9%	約8割
81.0～83.4%	8割超（える）
83.5～86.9%	8割半ば
87.0～88.9%	9割近く
89.0～89.4%	約9割

※内閣府の「高齢期に向けた『備え』に関する意識調査（平成25年度）」で、無作為に抽出した全国の35歳から64歳の男女6,000人を対象に実施。有効回収数は2,707人（45.1%）で、うち単身者は203人。

(3) 調査項目

調査項目は下表のとおりである。壮年期・高齢期で共通の設問が多いが、単独の設問もあり、壮年期には本人が高齢期になったときを想定した意識を聞

き、高齢期には現在の生活や介護の状況等を聞いている。問番号は調査票の番号であり、図番号は次のページ以降の対応する設問の図の番号である。

問番号・設問項目	図番号
(1) 居住について	
1 新宿区での居住期間は？	20
2 転入前の居住地域は？	12
2-1 中学校卒業時の居住地域は？	13
2-2 転入のきっかけは？	11
2-3 転入時、一人暮らしか？	—
3 一人暮らし期間は？	21
4 新宿区の暮らしやすさ、魅力は？	17
5 新宿区に住み続けたいか？	22
6 住まいの形態は？	8
7 住まいの間取りは？	9
8 住宅や居住に関する不満、不安は？	27
(2) 人や地域とのつながりについて	
9 親の居住地域は？ (壮)	14
9-1 親との連絡頻度は？ (壮)	37
10 兄弟姉妹の現在の人数は？	—
10-1 兄弟姉妹の居住地域は？	—
10-2 兄弟姉妹との連絡頻度は？	38
11 子どもがいるか？	2
11-1 子どもは現在何人いるか？	—
11-2 子どもの居住地域は？	40
11-3 子どもとの連絡頻度は？	39
12 親しい友人・知人は多いか？	45
12-1 親しい友人・知人はどんな人？	47
13 おしゃべりや気晴らしできる人は誰か？	48
14 悩みごとを相談できる相手は誰か？	49
15 正月に誰と過ごしたか？	50
16 近所とのつきあいの程度は？	42
17 地域で参加している団体や集まりは？	43
17-1 地域参加するきっかけは？	—
18 今後、地域参加をしたいか？	44
(3) 日常生活について	
19 余暇の過ごし方は？ (壮)	24
20 どんなときに充実感・満足感があるか？	25
21 一人暮らしの良い点は？	15
22 一人暮らしの困った点は？	16
23 今後も一人暮らしを続けたいか？	23
24 病気等で介護者がなく困った経験は？	51
25 要介護時に世話をしてくれる人は誰か？	52
26 孤独死への不安を感じるか？	29
27 健康状態はどうか？	33
28 ストレスを感じることはあるか？	35
28-1 ストレスの内容は？	36
28-2 ストレスを解消できているか？	—
29 夕食は主にどんなものを食べるか？	30
29-1 夕食を主に自分で調理しない理由は？	32

問番号・設問項目	図番号
(4) 高齢期のことについて (壮)	
30 高齢期につきあいたい友人・知人は？	62
31 高齢期に望む近所づきあいの程度は？	63
32 高齢期の生活に不安を感じるか？	64
32-1 その不安はどんな内容か？	65
33 高齢期への経済的な備えをどう感じるか？	66
34 高齢期の収入を何で得たいか？	67
35 高齢期にどんな住まい方を望むか？	68
(5) 結婚について	
36 現在、結婚しているか？	1
36-1 結婚への意向はあるか？	56
36-2 結婚したい理由は何か？	60
36-3 結婚するつもりのない理由は何か？ (壮)	61
(6) 区政への要望について	
37 一人暮らし向け施策・サービスの要望は？	73
(7) あなたご自身のことについて	
38 居住地域は？	10
39 性別は？	—
40 年齢は？	—
41 現在、収入のある仕事をしているか？	3
41-1 就業形態は？	4
41-2 職場の所在地域は？ (壮)	18
41-3 職場への通勤時間は？ (壮)	19
41-4 <無職の人>今後の仕事の意向は？ (壮)	—
41-5 <無職の人>現在の収入源は？	6
42 暮らし向きをどう感じるか？	26
43 年収はどれくらいか？	5
(8) 高齢期の人に (高)	
19 どのように買い物をしているか？	—
20 買い物で困っていることは何か？	69
21 普段、どの程度外出するか？	70
22 外出する頻度を増やしたいか？	—
23 外出するときに問題なことは？	71
28 日常生活の介護が必要か？	—
28-3 <要介護者>介護をしている人は誰か？	—
29 <要介護者>要介護認定を受けているか？	—
29-1 <要介護者>要介護度は？	—
29-2 <要介護者>介護保険サービスの利用は？	—
39-1 <仕事をしている人>仕事をする理由は？	72
44 預貯金はどれくらいか？	7
(9) 自由意見	
困りごと、不安なこと、必要なサービスは？	—

※設問項目欄の(壮)は壮年期のみ、(高)は高齢期のみ
 ※問番号は壮年期と高齢期で番号が異なるときは、壮年期の番号を記載している。

2. 意識調査結果の分析

(1) 回答者の基礎情報

はじめに回答者の基礎的な情報について男女・年齢区分別に分析する。配偶関係、子どもの有無、仕事、収入・預金、住宅の形態・間取り、居住地域などである。

- ・ 壮年前期（35～49歳）は男女とも、ほとんどが未婚、子どもなし、正規雇用の割合が高い。収入は男女とも300～700万円未満が半数を占め、民間賃貸、1DK以下の住宅に住む割合が高い。
- ・ 壮年後期（50～64歳）では離別が、女性の3割を超え、子どものいる人も増える。男女とも非正規雇用が多くなり、年収も300万円未満が増える。住宅は賃貸や持ち家など多様な住まいとなる。
- ・ 高齢期（65歳以上）では特に女性で死別が多く、女性の4割半ばに子どもがいる。持ち家が多く、女性の6割近くを占める。預貯金は、男性で「まったくない」が4割を超え、女性より厳しい状態にある。

図1 「現在、結婚していますか。」問36

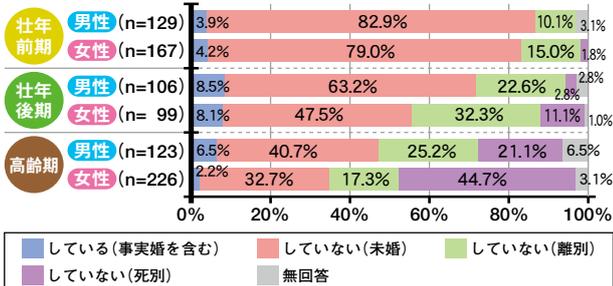


図2 「現在、お子さんがいますか。」問11

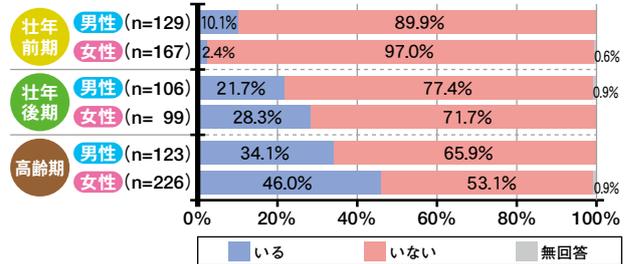


図3 「現在、収入のある仕事をしていますか。」問41

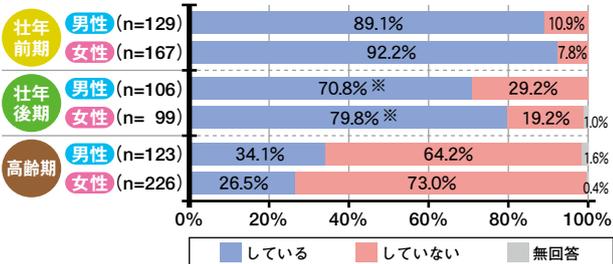


図4 「就業形態はどれですか。(高齢期は今まで行った収入のある仕事の中で最も長いもの) 問41-1

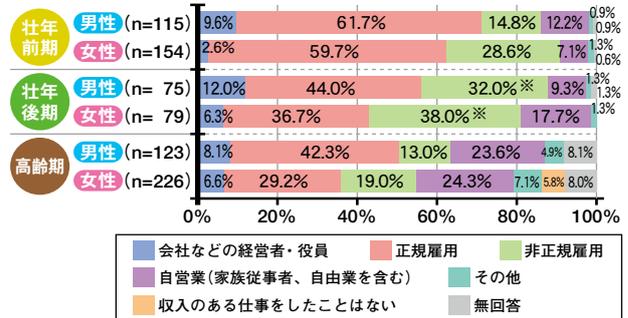


図5 「昨年1年間の収入の合計額はどれくらいですか。」問43

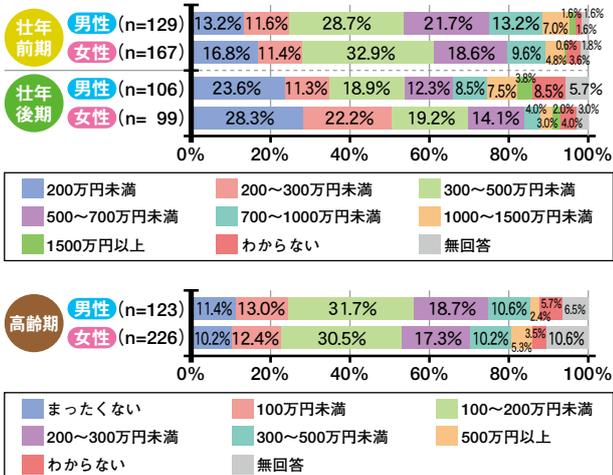
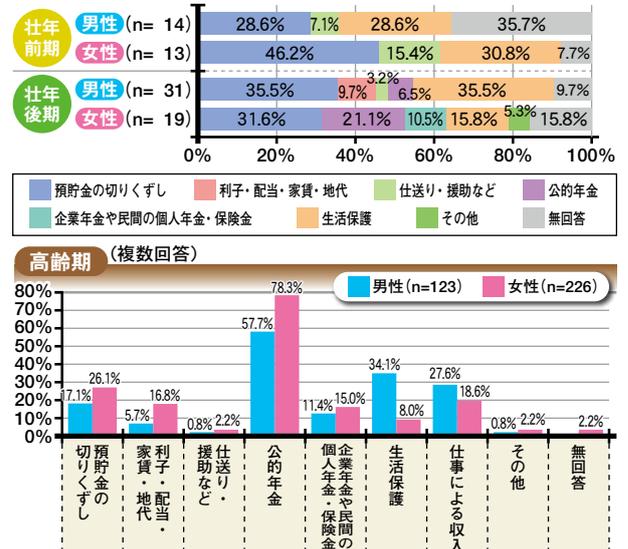


図6 「現在の収入源はどれですか。」問41-5 (壮年期は「現在、収入のある仕事をしていない」方)



※図3：50～59歳は男性78.5%、女性84.5%

※図4：50～59歳は男性24.0%、女性26.5%

● 配偶関係 (図 1)・子どもの有無 (図 2)

壮年前期では「未婚」が男性 8 割超、女性約 8 割で、子どもは「いない」がほとんど。壮年後期では「離別」が男性 2 割超、女性 3 割超で、子どもは男性の 2 割超、女性の 3 割近くが「いる」。高齢期では「死別」が増え、男性 2 割超、女性 4 割半ばで、子どもは男性の 3 割半ば、女性の 4 割半ばが「いる」。

図 7 「預貯金はどれくらいですか。」(高齢期のみ) 問 44

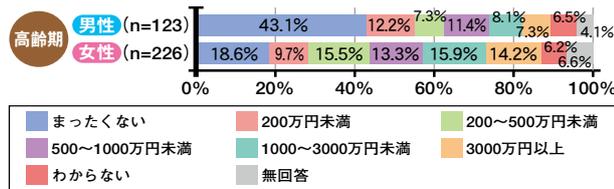


図 8 「現在お住まいの住宅の形態はどれですか。」問 6

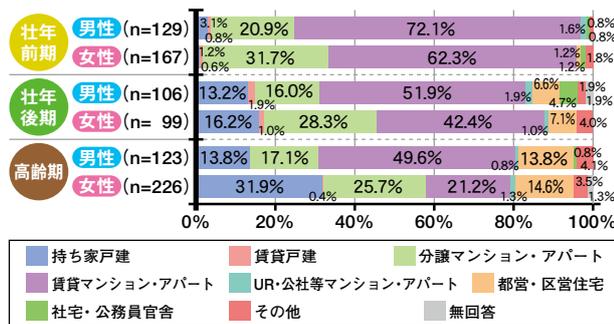


図 9 「現在お住まいの住宅の間取りはどれですか。」問 7

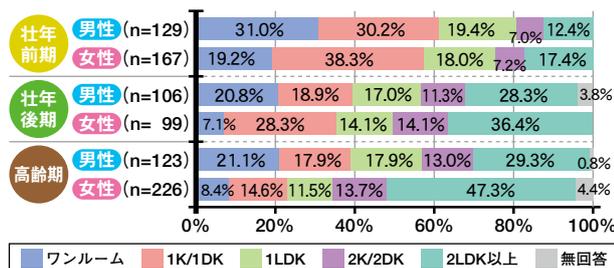


図 10 「お住まいの地域(所轄する特別出張所の地域)はどれですか。」問 38

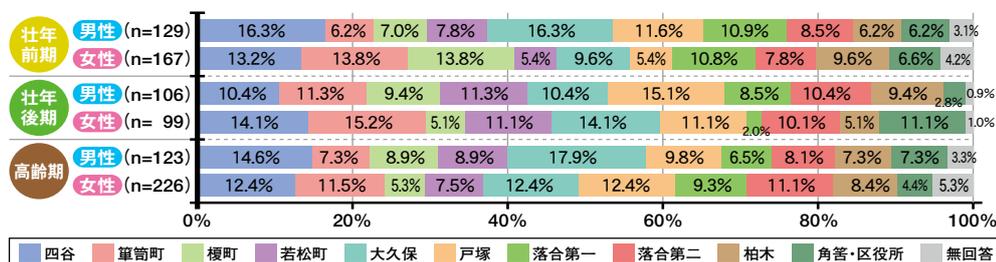


表 1 居住地域別回答率

	壮年期	高齢期
四谷	29.1%	44.7%
単箭町	33.9%	52.2%
榎町	27.0%	30.7%
若松町	30.4%	31.8%
大久保	28.5%	43.5%
戸塚	28.2%	40.6%
落合第一	30.1%	39.2%
落合第二	31.0%	48.6%
柏木	22.4%	38.9%
角筈・区役所	27.7%	61.3%
計	31.3%	44.9%

● 収入のある仕事 (図 3)・就業形態 (図 4)

壮年前期では収入のある仕事を「している」が男性約 9 割、女性 9 割超で、うち 6 割前後が「正規雇用」で、女性は「非正規雇用」が 3 割近くと男性の約 2 倍。壮年後期では仕事を「している」が男性約 7 割、女性 8 割と女性の方が高い (50 代では男性 8 割近く、女性 8 割半ば)。うち男性の 3 割超、女性の 4 割近くが「非正規雇用」(同、男女とも 2 割半ば)。高齢期では「している」が男性の 3 割半ば、女性の 2 割半ば。

● 年収 (図 5)・収入源 (図 6)・預貯金 (図 7)

壮年前期では男女とも年収「300 万円以上 700 万円未満」が 5 割以上。「300 万円未満」は男性 2 割半ば、女性 3 割近くで、「700 万円以上」は男性 2 割超、女性 1 割半ば。壮年後期では「300 万円未満」が男性 3 割半ば、女性約 5 割で、「700 万円以上」が男性 2 割、女性約 1 割。壮年期の収入のある仕事を「していない」人の収入源は、「預貯金の切りくずし」と「生活保護」が高く、特に後期男性で 3 割半ばと高い。高齢期では収入源は「公的年金」が最も高いが、男性は「生活保護」が 3 割半ばで、預貯金も 4 割超が「まったくない」。

● 住宅の形態 (図 8)・間取り (図 9)

壮年前期では「賃貸マンション・アパート」が特に男性で 7 割超と高く、女性は「分譲マンション・アパート」も 3 割超と男性の 1.5 倍。住宅の間取りは男女とも「ワンルーム」「1K/1DK」の合計が 6 割前後を占める。壮年後期では「持ち家戸建」「2LDK」以上が高くなる。高齢期では「持ち家戸建」は女性が 3 割超で、男性の 2 倍以上。「都営・区営住宅」も 1 割半ばと高くなる。

● 居住地域 (図 10、表 1)

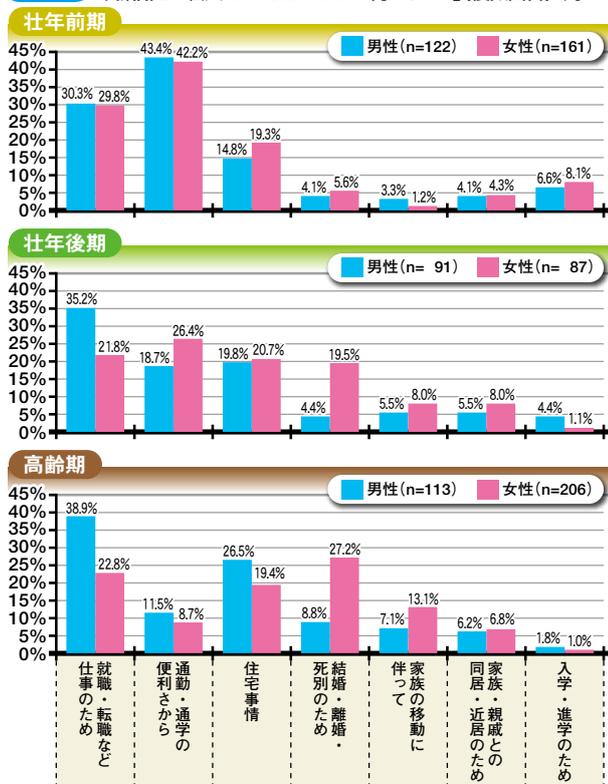
特別出張所地域別の回答率は、壮年期は単箭町がやや高く、柏木が低い。高齢期は角筈・区役所、単箭町が高く、榎町、若松町が低い。

(2) 新宿区に住むまでの経緯

I章図5から、単身世帯は同居人のいる人に比べて首都圏外からの転入者が多いことがわかった。20歳前後に首都圏外から都内23区に転入してきた人も多いのではないかと。新宿区に住む単身者は何をきっかけに、どこから新宿区に転入し、また、家族や友人とつながりの深い出身地域はどこなのだろうか。ここでは、出身地域と関連深いと思われる中学校卒業時の居住地と親の居住地をうかがった。

- ・ 転入のきっかけは、全体では「就職など仕事」が最も高いが、壮年前期では男女とも「通勤・通学の便利さ」が4割を超えて最も高い。
- ・ 前住地はどの区分とも23区が5割程度、首都圏外が1割程度だが、中学校卒業時には首都圏外に住んでいた割合が高く、壮年期では5割前後もいる。
- ・ 親の現在の居住地も壮年前期では首都圏外がおよそ5割と高く、23区内にいる人は2割程度で、親と離れて居住している人が多い。

図11 「新宿区に転入されたきっかけは何ですか。」(複数回答) 問2-2



● 転入のきっかけ (図11)

新宿区への転入のきっかけは、壮年前期では「通勤・通学の便利さ」が男女とも4割超で最も高く、壮年後期では男性は「就職など仕事」(3割半ば)、女性は「通勤・通学の便利さ」(2割半ば)が最も高い。高齢期では男性は「就職など仕事」(4割近く)、女性は「結婚・離婚・死別」(3割近く)が最も高い。

● 前住地 (図12)・中学校卒業時の居住地 (図13)

前住地は全区分で、「都内23区」が最も高く(4~5割台)、「その他道府県」は低い(1割前後)。中学校卒業時の居住地は、高齢期女性を除き、「その他道府県」が4割半ばから5割超で最も高い。

図12 「新宿区に転入する前、どちらにお住まいでしたか。」 問2

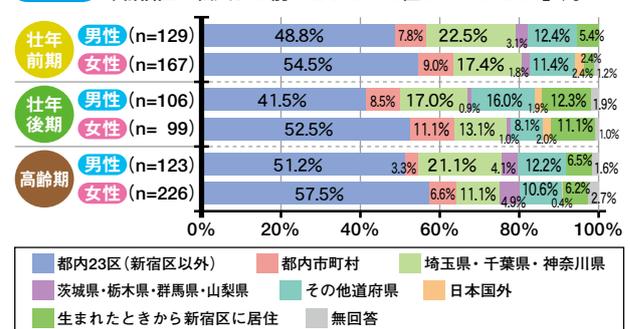


図13 「中学校を卒業したとき、どちらにお住まいでしたか。」 問2-1

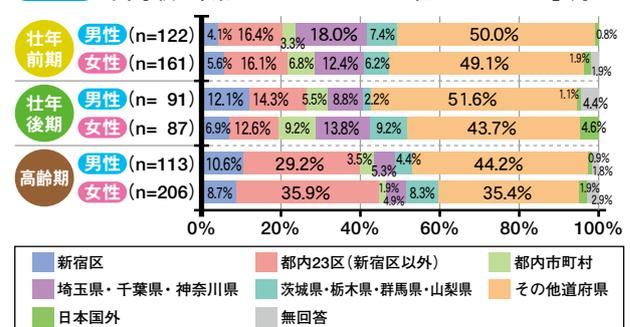
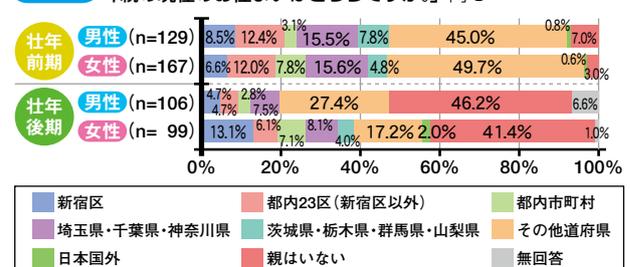


図14 「親の現在のお住まいはどちらですか。」 問9



● 親の居住地 (図14)

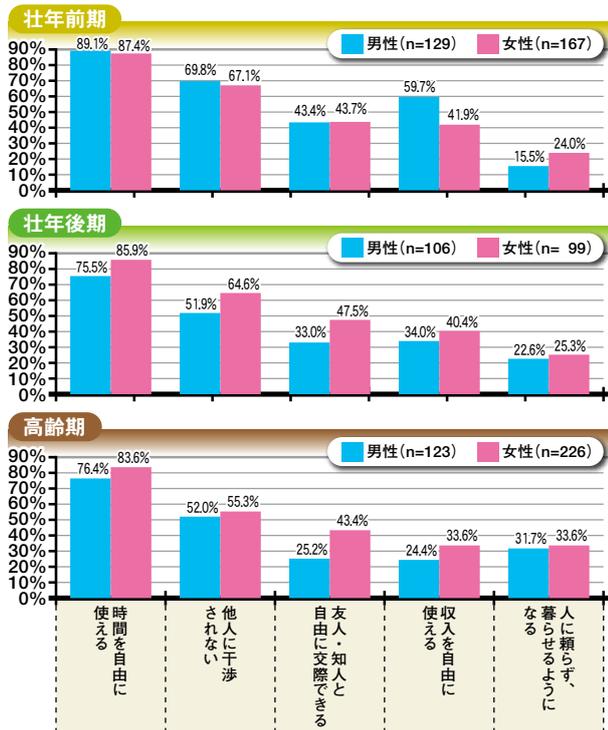
親の居住地は、壮年前期では「その他道府県」が男性4割半ば、女性5割で最も高い。一方、「新宿区」「都内23区」の合計は男性約2割、女性2割近くと低い。

(3) 一人暮らしの良い点・困った点

一人暮らしは自由気ままな面もあれば、日常生活や何か困りごとがあったときに誰にも頼れず不便な面もあるだろう。それは具体的にどんなことで、男女・年齢区分によって違いがあるのだろうか。

- 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に使える」ことで、全ての区分で8割前後と高い。「他人に干渉されない」ことも特に壮年前期でおよそ7割と高い。
- 一人暮らしの困った点は、「病気時に世話をしてくれる人がいない」が全ての区分で4～6割台と高い。壮年前期では「家賃や生活費の負担」が特に女性で高く、壮年後期と高齢期の女性では「重い物の移動」が高い。その他、「会話が少なくなる」「家事が面倒になる」「不規則な生活習慣から抜け出せなくなる」が目立つ。

図 15 「一人暮らしをしていて「いいな」と思うことはどれですか。」
(複数回答) 問21



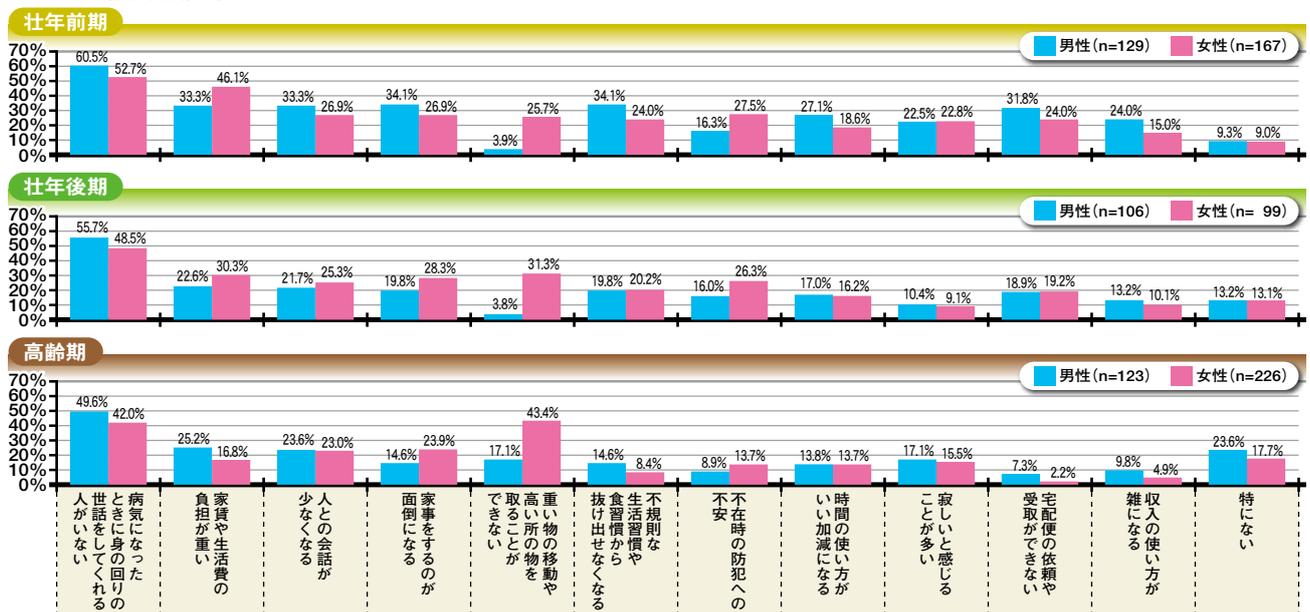
● 一人暮らしの良い点 (図 15)

一人暮らしをして「いいな」と思うことは、各区分とも「時間を自由に使える」が7割半ばから約9割で最も高く、「他人に干渉されない」が5割超から7割で続く。壮年前期の男性では「収入を自由に使える」も6割と高い。壮年後期と高齢期では、「友人・知人と自由に交際できる」は女性の方がかなり高くなっている。

● 一人暮らしの困った点 (図 16)

「困ったな」と思うことは、「病気時に世話をしてくれる人がいない」が各区分とも高く、4割超から約6割を占める。壮年前期では「家賃や生活費の負担」が女性で4割半ばと高い。「家事をするのが面倒」と「不規則な生活習慣から抜け出せない」は男性で3割半ばと高い。壮年後期と高齢期では「重い物の移動など」が女性で高くなる(3割超、4割超)。全体的に、若い年齢区分ほど困ったと感じる割合が高い。

図 16 「一人暮らしをしていて「困ったな」と思うことはどれですか。」
(複数回答) 問22

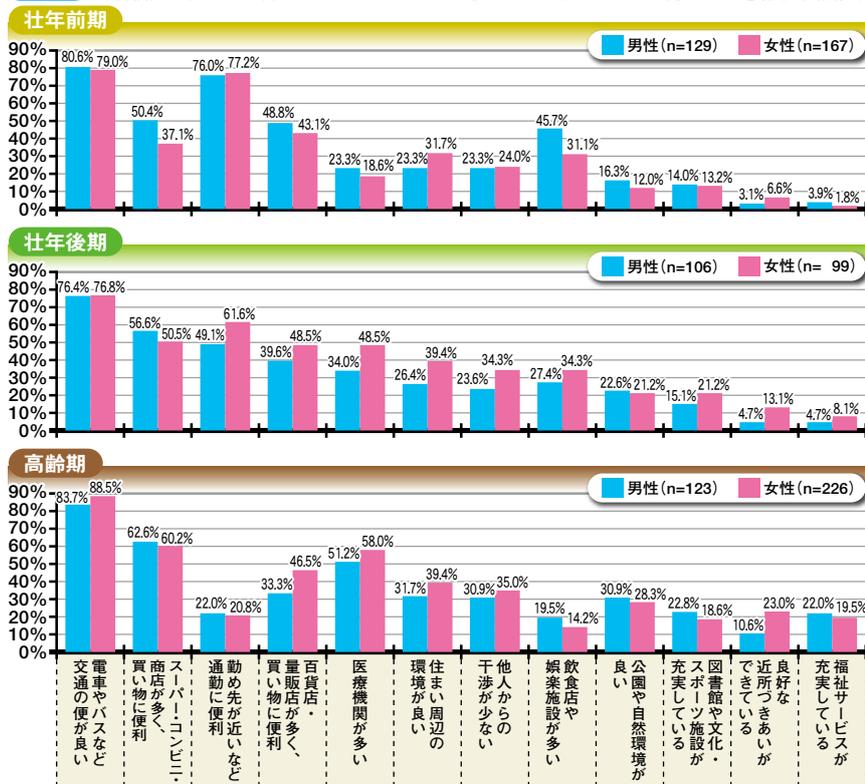


(4) 新宿区の暮らしやすさ

なぜ、新宿区は一人暮らしをする人が多いのだろうか。昨年度の調査では、新宿区の暮らしやすさ・魅力として、単身者・同居人のいる人を問わず、「通勤・通学など交通の便が良い」が最も高かった。今回はこれを「交通の便が良い」と「通勤に便利」に分けてうかがった。

- ・新宿区の暮らしやすさ・魅力は、全ての区分で「交通の便が良い」が8割程度を占め、特に高齢期の女性では9割近くと高い。「通勤に便利」は、壮年前期で男女ともおよそ8割と非常に高く、壮年後期の女性も6割超と高い。職場は新宿区または23区内がほとんどで、通勤時間も30分以内が高い。
- ・「コンビニなど買い物に便利」「百貨店など買い物に便利」も高く、「医療機関が多い」は、壮年後期の女性と高齢期で5割前後と高い。その他、壮年前期の男性で「飲食店・娯楽施設」が高く、「住環境が良い」は女性で高め。「他人からの干渉が少ない」が壮年後期と高齢期で目立つ。

図17 「新宿区に住んで、暮らしやすい、または魅力があると思うことは何ですか。」(複数回答) 問4



●新宿区の暮らしやすさ・魅力 (図17)

新宿区の暮らしやすさは、各区分とも、「電車やバスなど交通の便が良い」が最も高く、7割半ばから9割近くを占める。壮年前期では「勤め先が近いなど通勤に便利」が男性7割半ば、女性8割近くと高い。「飲食店や娯楽施設が多い」は特に男性で高い(4割半ば)。壮年後期の女性と高齢期では「医療機関が多い」が高い(5割近く～6割近く)。高齢期では「コンビニなど買い物に便利」が男性6割超、女性6割と高い。

図18 「現在の職場はどこですか。」問41-2

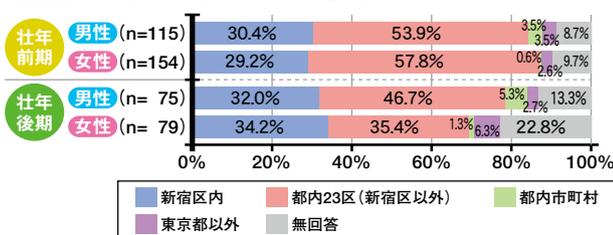
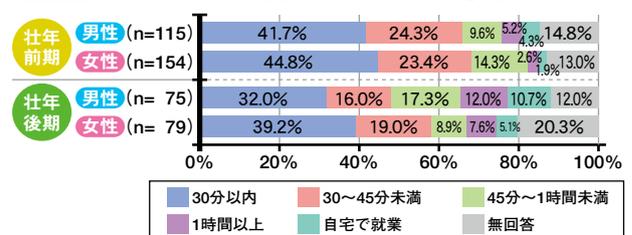


図19 「職場までの通勤時間はどのくらいですか。」問41-3



●職場の所在地 (図18)・通勤時間 (図19)

職場の所在地は、各区分とも「都内23区(新宿区以外)」と「新宿区内」がほとんどで、特に壮年後期の女性は「新宿区内」が3割半ばで、無回答を除くと4割半ばになる。職場までの通勤時間は、

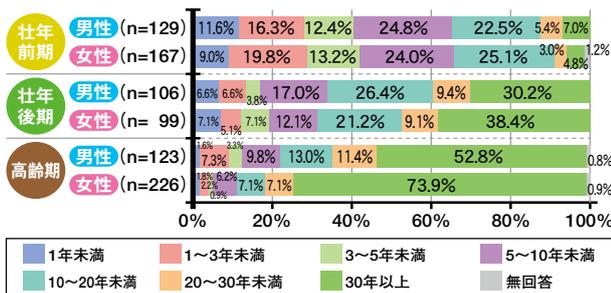
各区分とも「30分以内」が最も高く、特に壮年前期では男性4割超、女性4割半ば。各区分とも「1時間以上」は著しく低いが、壮年後期の男性では1割を超える。このことから、「勤め先が近く通勤に便利」な様子がわかる。

(5) 居住意向

I 章図 6 から、単身者は同居人がいる人に比べて居住期間が短い傾向にあるが、長期居住者も多いことがわかった。では、単身者は今後とも新宿区に住み続けたい、また、一人暮らしを続けたいと考えているのだろうか。

- ・回答者の居住期間は、壮年前期では3年未満が男女とも3割近くと高いが、年齢区分が上がるほど長くなり、特に高齢期の女性では30年以上が7割半ばとなる。
- ・新宿区での居住継続意向は、壮年期でおよそ7割、高齢期でおよそ8割と高い。
- ・今後の一人暮らしの意向は、全ての区分で「続けたい」が「続けたくない」より高く、「続けたい」は年齢区分が上がるほど高くなる。

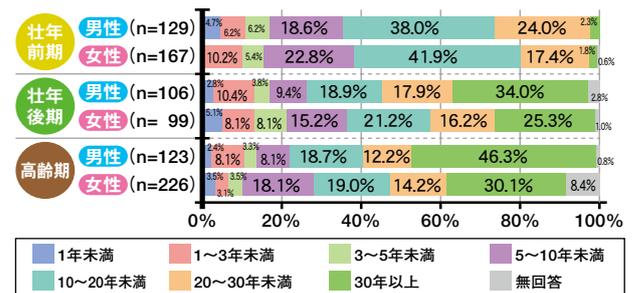
図 20 「新宿区に住んで何年になりますか。」問 1



●新宿区での居住期間 (図 20)

新宿区での居住期間は、壮年前期では3年未満が男女とも3割近くいるが、10年以上も3割以上いる。壮年後期では3年未満は1割超で「30年以上」が最も高く、男性は3割、女性は4割近くいる。高齢期では「30年以上」の割合がさらに高くなり、男性は5割を超え、女性は7割半ばを占める。

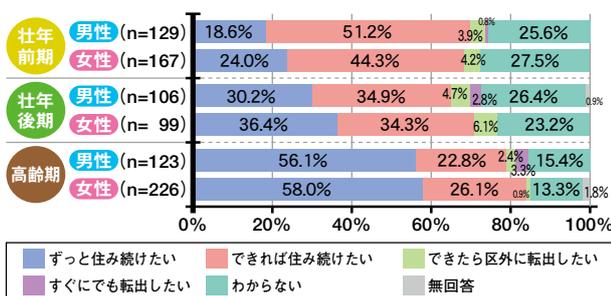
図 21 「一人でお住まいの期間は、通常して何年になりますか。」問 3



●一人暮らしの期間 (図 21)

一人暮らしの期間は、壮年前期では「10~20年未満」が男性4割近く、女性4割超で最も高い。壮年後期と高齢期では「30年以上」が男女とも最も高く、特に高齢期の男性では4割半ばを占める。一人暮らし期間は男性の方が長く、「20年以上」では、壮年後期の男性は5割超、高齢期の男性は6割近くも占める。

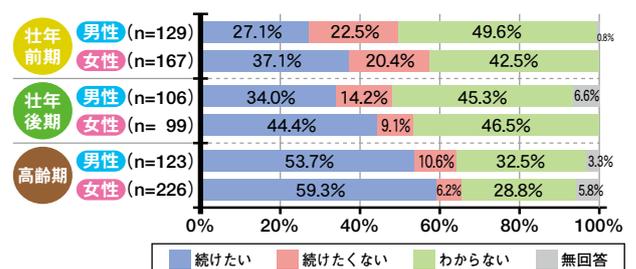
図 22 「これからも新宿区に住み続けたいですか。」問 5



●新宿区での居住継続意向 (図 22)

壮年期では新宿区に「ずっと住み続けたい」「できれば住み続けたい」の合計は6割半ばから約7割で、高齢期では8割近くから8割半ばと高い。「ずっと住み続けたい」は年齢区分が上がるほど高くなる。全区分とも「できたら区外に転出したい」「すぐにも転出したい」の合計は1割未満と著しく低い。

図 23 「今後も一人暮らしを続けたいと思いますか。」問 23



●一人暮らしの継続意向 (図 23)

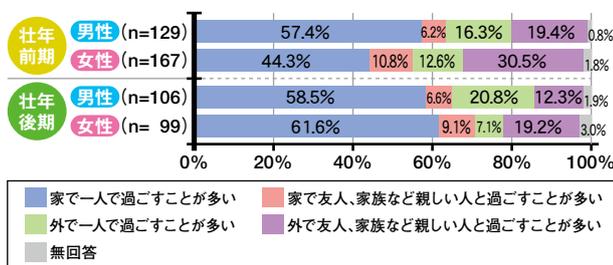
一人暮らしを続けることに、壮年期では「わからない」が男女とも最も高く(4割超~5割)、「続けたい」は女性の方が高い。高齢期では「続けたい」が男性5割半ば、女性約6割と高い。「続けたくない」は壮年前期では男女とも2割程度で年齢区分が上がるほど低くなり、高齢期では1割前後になる。

(6) 暮らしと意識

単身者は余暇をどう過ごし、どのような時に充実感や満足を感じるのだろうか。また、暮らし向きの感じ方や住宅・居住に関する不満や不安、そして孤独死への不安に対する意識をうかがった。

- ・ 壮年期の余暇の過ごし方は、壮年前期の女性では「親しい人と過ごす」が4割超と高いが、それ以外の区分では「家で一人で過ごす」が6割前後と高い。
- ・ 充実感や満足感を感じることは、ほとんどの項目で女性の方が高く、「友人・知人との交流」は全ての年齢区分で女性は5割以上。「仕事に打ち込んでいるとき」も女性の方が高い。
- ・ 暮らし向きは、「ゆとりがある」は壮年前期の女性では3割半ばと最も高く、「大変苦しい」は壮年後期の女性で2割と最も高い。
- ・ 住宅や居住への不満は、「家賃が高い」「部屋が狭い」は特に壮年前期で高く、「震災時の火災・倒壊」は女性で高い。「家賃が高い」は民間賃貸住宅居住者の5割近くを占める。
- ・ 孤独死への不安は、各年齢区分とも女性の方が不安に思っている割合が高い。

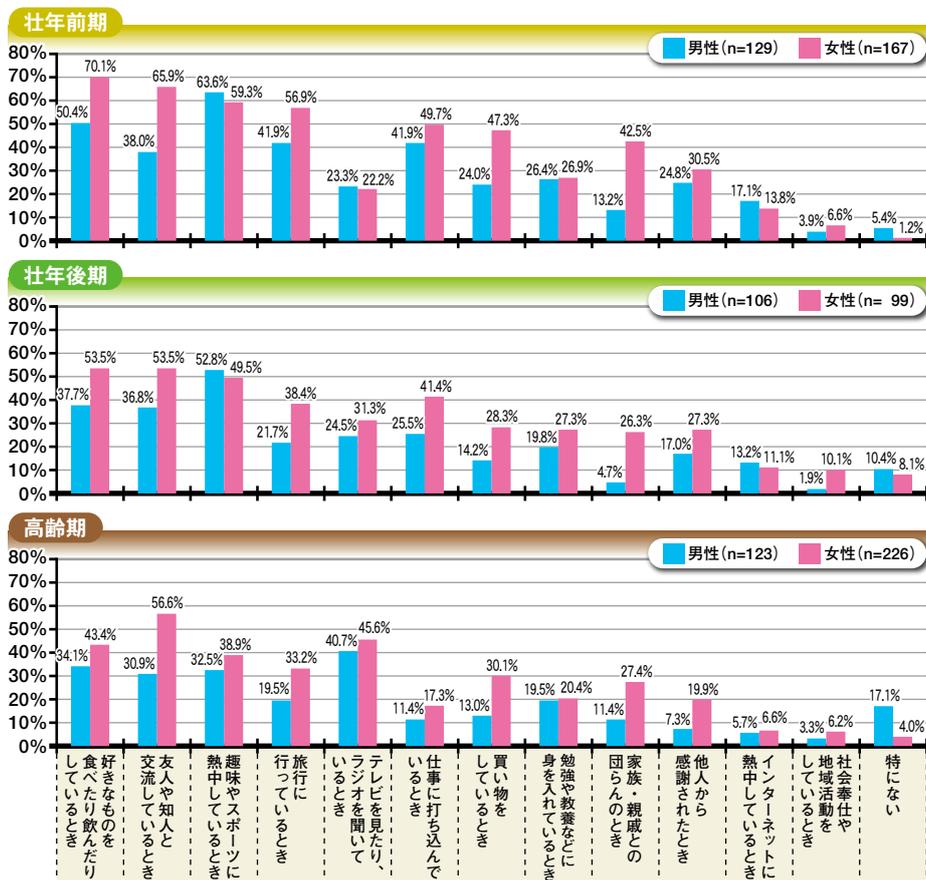
図24 「余暇をどのように過ごすことが多いですか。」問19



● 余暇の過ごし方 (図24)

余暇は、各区分とも「家で一人で過ごす」が最も高い(4割半ば～6割超)。「友人、家族など親しい人と過ごす」(「家で」と「外で」の合計)は、女性の方が高く、特に、壮年前期の女性は4割超と高い。また、壮年後期の男性は、「外で一人で過ごす」が約2割と比較的高い。

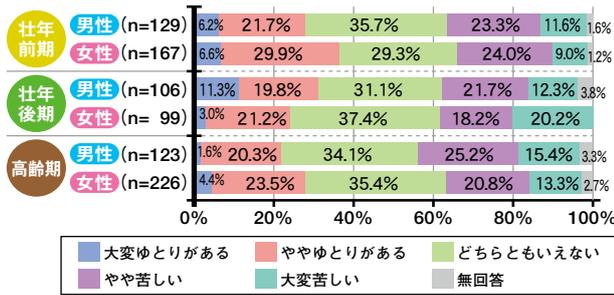
図25 「どのようなときに充実感や満足感を感じますか。」(複数回答) 問20



● 充実感や満足感を感じること (図25)

充実感や満足感を感じる割合は女性の方が高く、壮年期では「好きなものを食べたり、飲んだり」「友人や知人との交流」などほとんどの項目で女性の方が高い。特に、「友人や知人との交流」は各区分とも女性が5割半ばから6割半ばと高く、男性は約3割から4割近く程度。「仕事に打ち込んでいるとき」も女性の方が高く、壮年前期では5割、後期では4割超。高齢期では男女とも「テレビやラジオ」が4割以上と高い。

図26 「現在の暮らし向きについてどのように感じていますか。」問42



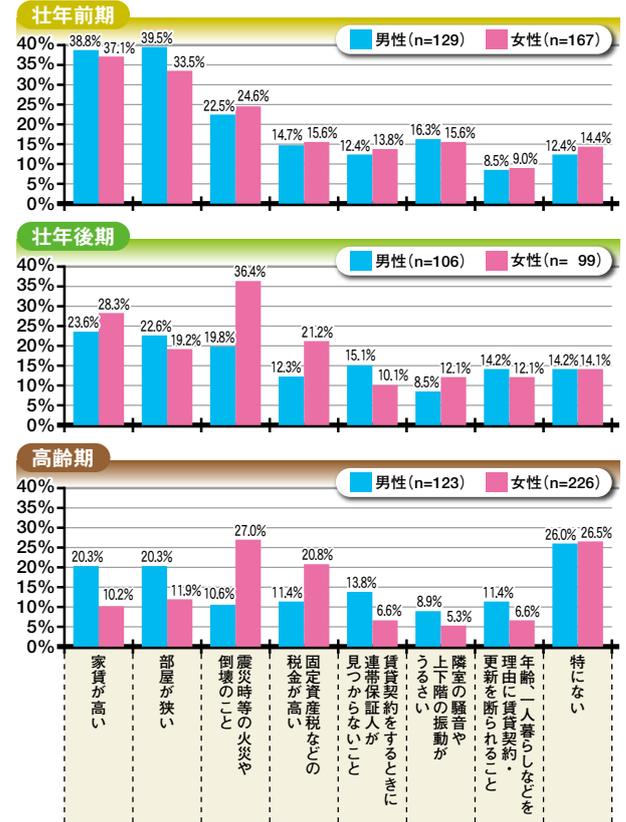
●暮らし向き (図26)

暮らし向きは、各区分とも「どちらともいえない」が高く (約3割~4割近く)、「大変ゆとりがある」「ややゆとりがある」の合計は全ての区分で低い (2割超~3割半ば)。「大変苦しい」は、壮年後期の女性が2割と最も高く、他の区分は1割前後から半ば。

●住宅や居住への不満・不安 (図27)

不満や不安は、壮年前期では男女とも「家賃が高い」「部屋が狭い」が高い (3割半ば~4割)。壮年後期では、男性は「家賃が高い」「部屋が狭い」が高く、女性は「震災時の火災や倒壊」が3割半ばで最も高い。高齢期では、女性は「火災や倒壊」が3割近くと最も高く、「特にない」も男女とも2割半ばと高い。

図27 「現在お住まいの住宅や、今後の居住に関して不満や不安を感じていることはどれですか。」(複数回答) 問8



●クロス集計 (居住不満×住宅形態) (図28)

不満や不安を住宅形態別 (図8) にみると、「持ち家」では「固定資産税などの税金が高い」が3割半ばで最も高く、「火災や倒壊」が続く。「民間賃貸」では「家賃が高い」が5割近くと極めて高く、「部屋が狭い」が3割半ばで続く。「賃貸契約時の連帯保証人」や「契約・更新を断られる」もおおよそ2割ある。「特にない」は「民間賃貸」では1割超と低く、「持ち家」(2割半ば)、「その他」(3割)に比べて、住宅に困っている様子がわかる。

図28 ●クロス集計(居住不満×住宅形態)

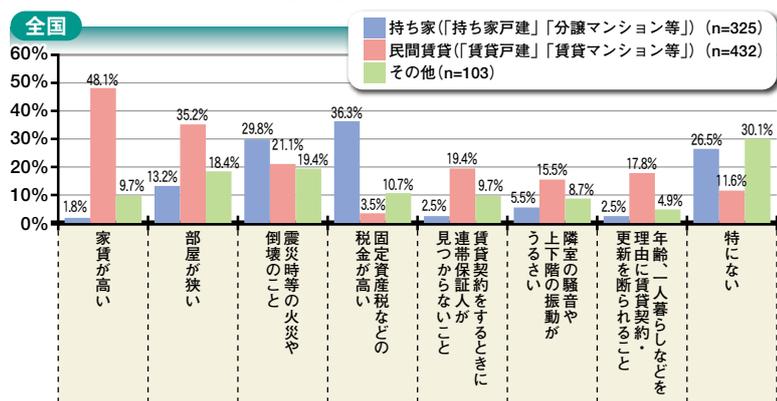
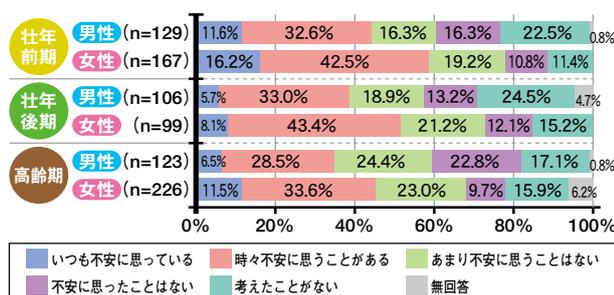


図29 「孤独死について不安に思ったことがありますか」問26



●孤独死への不安 (図29)

孤独死への不安は、各区分とも「時々不安に思うことがある」が最も高い。「いつも不安に思っている」と合わせると、各区分とも女性の方が高く、壮年前期で6割近く、後期で5割超、高齢期で4割半ば。「不安に思ったことはない」「考えたことはない」の合計は各区分とも男性のおよそ4割を占める。

(7) 食生活・健康状態

昨年度の調査から、特に男性の単身者は同居人がいる人に比べて家で調理したものを食べる割合が低く、特に壮年期の男性では健康状態があまりよくない傾向がみられた。今回は、自分で調理しない理由やストレスの内容など、さらに詳しくうかがった。

- ・夕食に主に「自分で調理したものを食べる」は、年齢区分が上がるほど高くなり、女性の方が高い。壮年期の男性は3割程度と低く、外食の割合が高め。
- ・主に自分で調理したものを食べない理由は、男性はどの年齢区分でも「作るのが面倒」が最も高く、壮年前期では男女とも「時間がないから」が5割を超える。
- ・健康状態が「よい」は、壮年前期の女性は5割近くと高い。各年齢区分とも、男性の方が「よくない」「あまりよくない」の割合が高い。よくない傾向は年収300万円未満で顕著である。
- ・ストレスは壮年前期の女性の2割半ばで「ひんぱんに」感じており、その内容は、壮年前期では「仕事」、高齢期では「健康状態」、壮年後期ではどちらも高い。「収入や家計」も各区分で高い。

図30 「夕食に主にどのようなものを食べますか。」問29

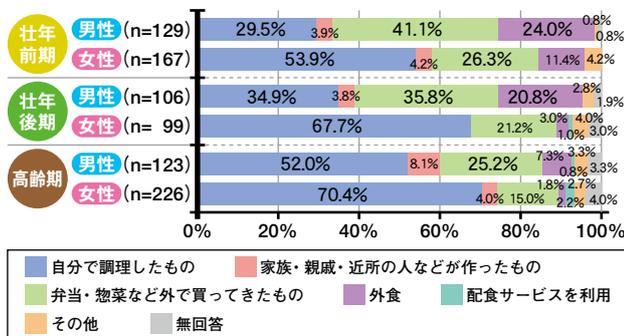


図31 ●クロス集計 (夕食×年収)

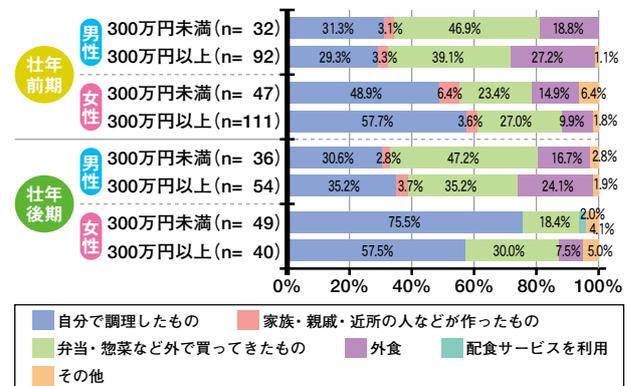
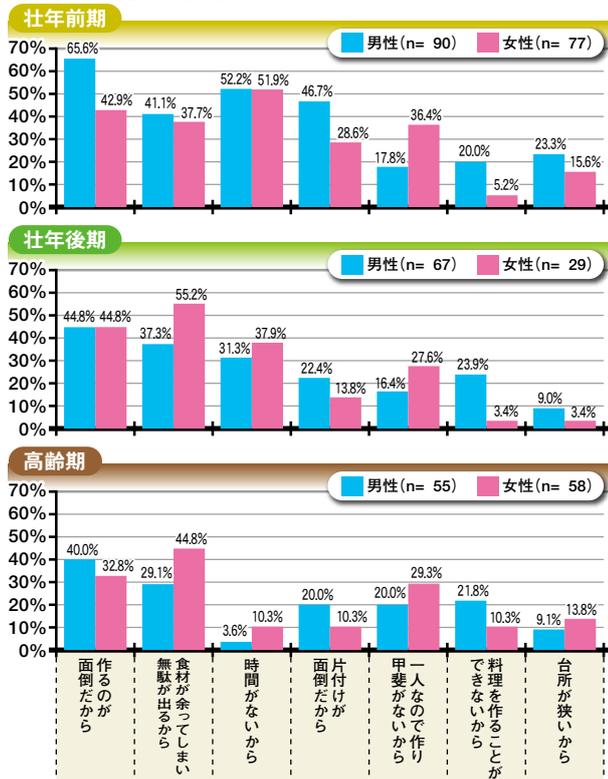


図32 「夕食に主に自分で調理したものを食べない理由は何ですか。」(複数回答) 問29-1



●夕食に食べるもの (図30)

「自分で調理したものを食べる」は、壮年前期では男性3割、女性5割半ば、後期では男性3割半ば、女性7割近くで、高齢期では男性5割超、女性7割と各区分とも女性が高く、また、年齢が上がるほど高くなる。「外食」は壮年前期の男性が最も高い(2割半ば)。

●クロス集計 (夕食×年収) (図31)

壮年期について、夕食で食べるものを年収区分別(図5)にみると、300万円未満では、男性は「外食」の割合が低くなり、「弁当・惣菜」が高くなる。女性は、壮年前期では「外食」が高くなるが、後期では「外食」がまったくなくなり、「自分で調理したもの」が7割半ばとかなり高くなる。

●自分で調理したものを食べない理由 (図32)

各年齢区分とも男性は「作るのが面倒だから」が最も高く、女性は壮年前期では「時間がないから」、壮年後期と高齢期では「食材が余り、無駄が出るから」が最も高い。各区分とも女性は「作り甲斐がないから」、男性は「作ることができないから」も高い。

図33 「ご自分の健康状態をどのように感じていますか。」問27

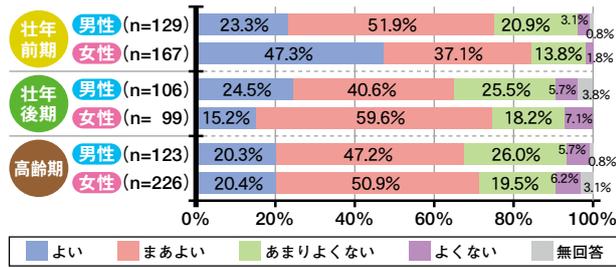


図34 ●クロス集計 (健康状態×年収)

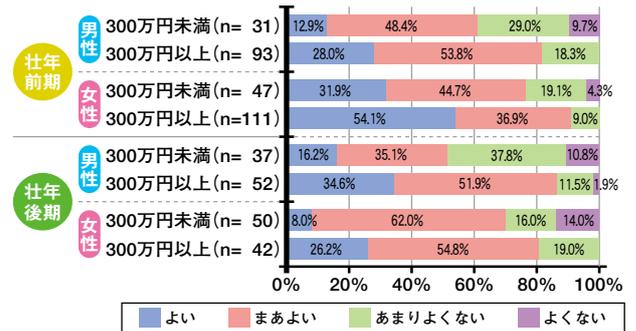
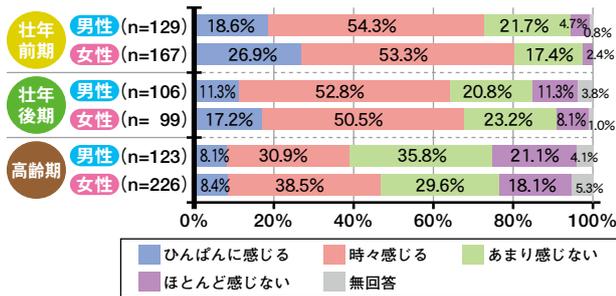


図35 「日頃、ストレスを感じることはありませんか。」問28



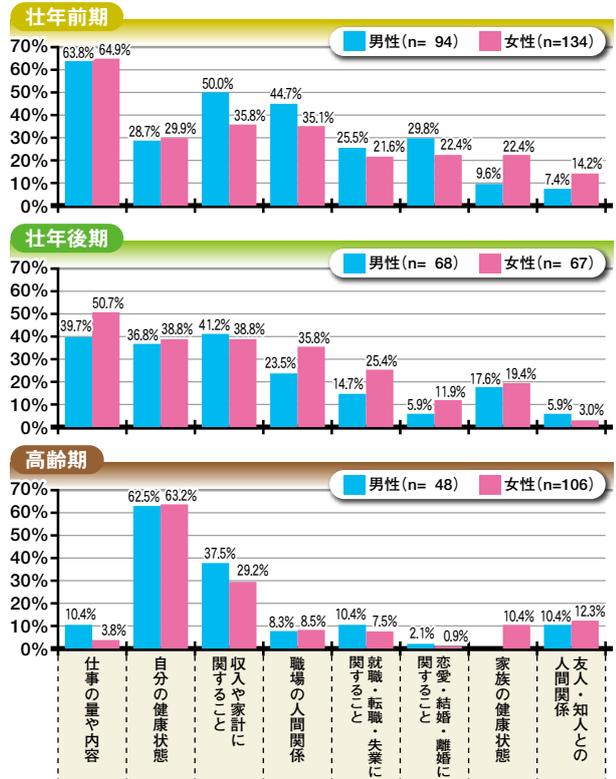
●健康状態 (図33)

健康状態は、各区分とも「よい」「まあよい」の合計は6割半ばから8割半ばで、特に、壮年前期の女性は「よい」が5割近くと高い。各区分とも「あまりよくない」「よくない」の合計は男性の方が高く、壮年後期と高齢期では3割を超える。

●クロス集計 (健康状態×年収) (図34)

健康状態を年収区分別 (図5) にみると、各区分とも「あまりよくない」「よくない」の合計は、年収300万円未満で高く、特に、壮年後期の男性では5割近くを占める。300万円以上と比べて3倍以上高い。

図36 「どのようなことにストレスを感じますか。」(複数回答) 問28-1



●ストレスの感じ方 (図35)

ストレスを「ひんぱんに感じる」「時々感じる」の合計は壮年前期では男性7割超、女性8割で、壮年後期では男性6割半ば、女性7割近く、高齢期では男性約4割、女性4割半ばと、年齢区分が上がるほど低くなる。男女別にみると、各年齢区分とも女性は男性より高くなっており、特に、「ひんぱんに感じる」は壮年前期の女性が2割半ばと高い。

●ストレスの内容 (図36)

壮年前期では、「仕事の量や内容」が男女とも6割半ばで最も高く、「収入や家計に関すること」「職場の人間関係」「自分の健康状態」「恋愛・結婚・離婚に関すること」も高い。壮年後期では、男性は「収入や家計」が4割超、女性は「仕事」が約5割で最も高く、「健康状態」「職場の人間関係」も高い。高齢期では、男女とも「健康状態」が6割超で特に高く、「収入や家計」が続く。男女別にみると、壮年前期では、「収入や家計」は男性の方が特に高く、壮年後期では「仕事」「職場の人間関係」が女性の方が高い。高齢期では男女ともほとんど差がみられない。

(8) 家族とのつながり

昨年度の調査から、年齢区分が上がるほど、単身者が最も親しくしている家族・親戚は近くに居住し、連絡頻度も高くなることがわかった。では、単身者は親、子ども、兄弟・姉妹など家族とどのくらいの頻度で連絡をとっているのだろうか。

- ・全ての年齢区分で女性の方が親、子ども、兄弟・姉妹と連絡を頻繁にとっている。
- ・男性は、子どもと「ほとんど・まったく連絡をとっていない」割合が高く、特に、離別した高齢期の男性は、子どもとのつながりが非常に薄い傾向にある。
- ・高齢期の女性は、子どもが近くに居住しており、23区内に7割超、うち新宿区内に4割近くが居住している。

図 37 「あなたの親とは、どのくらいの頻度で連絡をとっていますか。」問 9-1

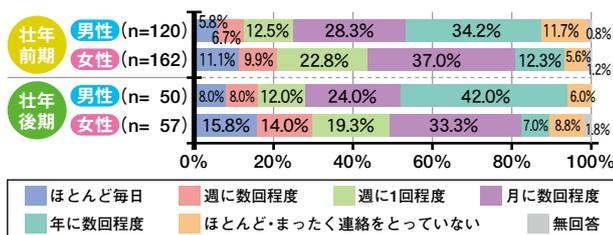


図 38 「最も親しい兄弟・姉妹とは、どのくらいの頻度で連絡をとっていますか。」問 10-2

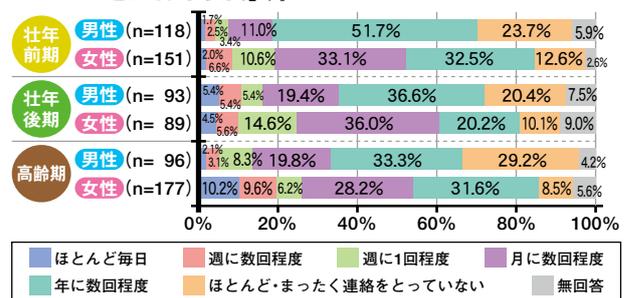


図 39 「最も関わりの深いお子さんとは、どのくらいの頻度で連絡をとっていますか。」問 11-3

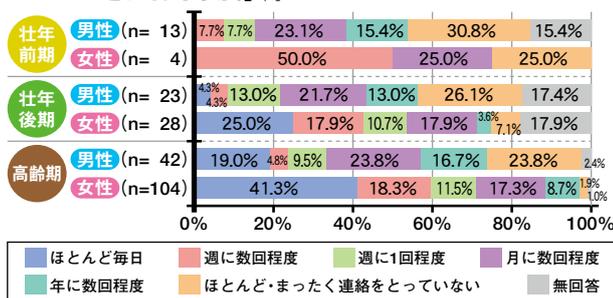
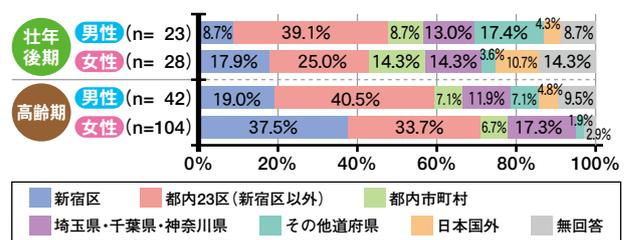


図 40 「最も関わりの深いお子さんのお住まいはどちらですか。」問 11-2



● 親との連絡頻度 (図 37)

壮年期の親との連絡頻度は、男性は「年に数回程度」、女性は「月に数回程度」が最も高い。

● 兄弟・姉妹との連絡頻度 (図 38)

兄弟・姉妹との連絡頻度は、各区分とも男性は「年に数回程度」、女性は壮年期では「月に数回程度」、高齢期では「年に数回程度」が最も高い。「ほとんど・まったく連絡をとっていない」は、女性の1割前後に比べ、男性は2割～約3割と高い。

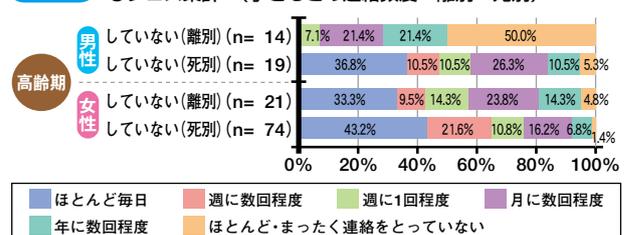
● 子どもとの連絡頻度 (図 39)

壮年後期と高齢期の子どもとの連絡頻度は、各区分とも男性は「ほとんど・まったく連絡をとっていない」が最も高い。女性は「ほとんど毎日」が最も高く、特に高齢期では、4割を超える。

● 子どもとの居住地 (図 40)

ほとんどの区分で「都内23区」が最も高いが、高齢期の女性では、「新宿区」が4割近くで最も高

図 41 ● クロス集計 (子どもとの連絡頻度×離別・死別)



い。「都内23区」と合すると7割を超える。

● クロス集計 (子ども連絡頻度×離死別) (図 41)

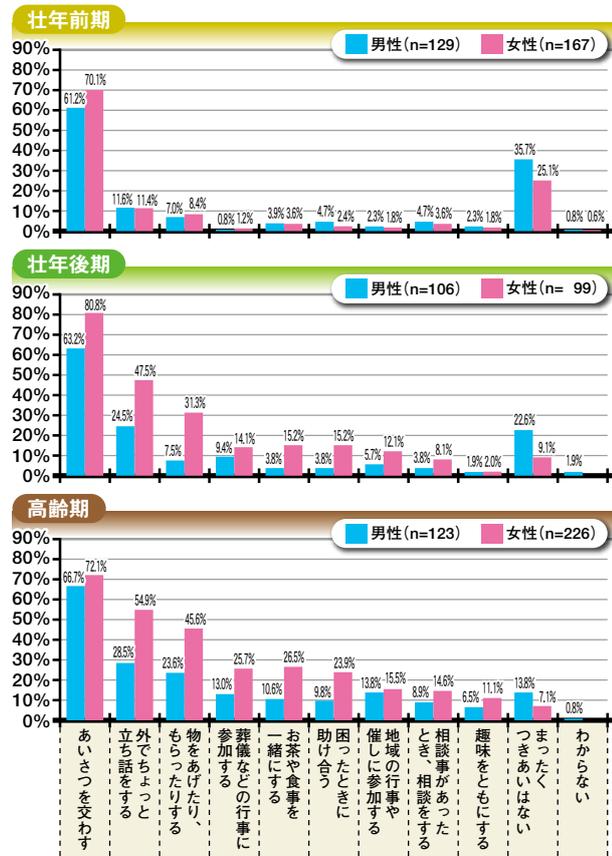
離別、死別の多い高齢期について離死別ごとに(図1)子どもとの連絡頻度をみると、男性の離別者は「ほとんど・まったく連絡をとっていない」が5割と著しく高く、多くても「週に1回程度」であり、死別は女性と同様である。女性は離別、死別に違いはほとんどない。

(9) 近所や地域とのつながり

昨年度の調査から、単身者は同居人がいる人に比べて近所づきあいの程度が低いこと、また、地域の団体や集まりへの参加意向が低いことがわかった。男女・年齢区分で違いがあるのだろうか。

- ・近所の人とのつきあいの程度は、全ての区分で、「あいさつを交わす」が6割超から約8割で最も高い。「まったくつきあいはない」は壮年前期で高く、男性は3割半ば、女性は2割半ば。年齢区分が上がるほど、また、女性の方が近所づきあいの度合いが高く、特に高齢期の女性で顕著である。
- ・地域で参加している団体や集まりは、「参加していない」が全ての区分で著しく高く、壮年前期では男女とも8割以上。年齢区分が上がるとともに参加度は高まり、高齢期の女性では「参加していない」は4割台に。
- ・今後、参加意向がある人は、各区分とも2割近くから3割半ばと低く、特に男性の方が低い。

図 42 「近所の方との程度のつきあいをしていますか。」
(複数回答) 問 16



● 近所づきあいの程度 (図 42)

各区分とも「あいさつを交わす」が6割超から約8割で最も高い。「まったくつきあいが無い」は壮年前期が男性3割半ば、女性2割半ばで特に高い。壮年後期、高齢期では「つきあいはない」を除く全ての項目で女性の方が高くなっている。

● 参加している地域団体・集まり (図 43)

「参加していない」は、壮年前期は8割以上、壮年後期は7割前後、高齢期男性は7割近くと極めて高い。高齢期の女性は「参加していない」が5割近くと他の区分より低く、「健康づくり・スポーツ」に2割近く参加している。

図 43 「地域で参加している団体や集まりは何ですか。」
(複数回答) 問 17

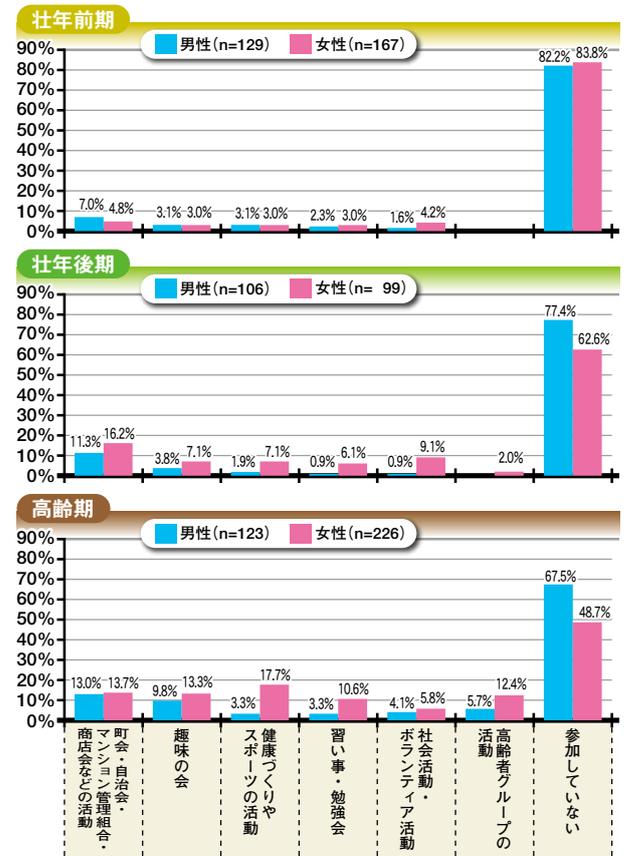
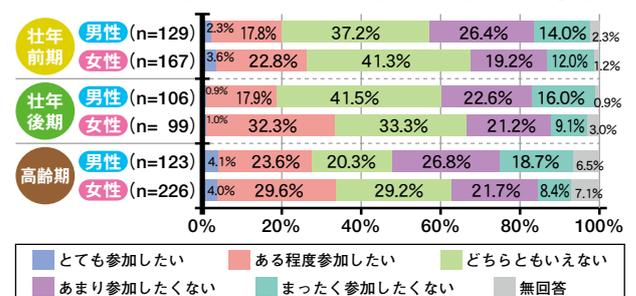


図 44 「今後、地域の団体や集まりに参加したいと思いますか。」 問 18



● 今後の参加意向 (図 44)

壮年期はどの区分とも「どちらともいえない」が最も高いが、高齢期の男性は「あまり参加したくない」、女性は「ある程度参加したい」が最も高い。

(10) 友人・相談相手

昨年度の調査から、単身者は悩みごとを「友人・知人」に相談する人が多く、高齢期になると別居している「子ども」や「兄弟・姉妹」に相談する人が多いことがわかった。単身者が親しくしている友人・知人、気晴らしや相談できる相手はどんな人なのだろうか。

- ・親しくしている友人・知人の多さは、特に高齢期で男女に著しく違いがみられ、「いない」「とても少ない」は女性は2割だが、男性は4割にもなる。
- ・壮年期では年収によって大きな違いがみられ、男女とも年収が300万円未満で、友人・知人が「いない」「とても少ない」が高くなる。
- ・友人・知人は、ほとんどの区分で「仕事関係」が多く、壮年期では7割前後。「近所」の友人・知人は、壮年期では少ないが、年齢区分が上がるほど高くなり、高齢期の女性では5割近くに。
- ・気晴らしできる相手は、壮年期では「仕事関係の友人・知人」「その他の友人・知人」が高く、高齢期の女性は「近所の友人・知人」が最も高い。
- ・悩みごとを相談できる相手は、気晴らしできる相手と同じ傾向にあるが、「いない」が各年齢区分とも特に男性で高く、壮年期で2割前後、高齢期で2割半ば。「子ども」は男性で著しく低い。
- ・正月を一緒に過ごした人は、壮年期では「親」が5割以上だが、壮年後期と高齢期では特に男性で「一人で過ごした」が高く、高齢期の男性で5割半ばを占める。

図 45 「親しくしている友人・知人が多い方だと思いますか。」問 12

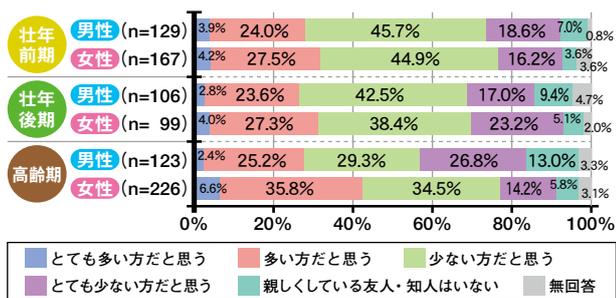
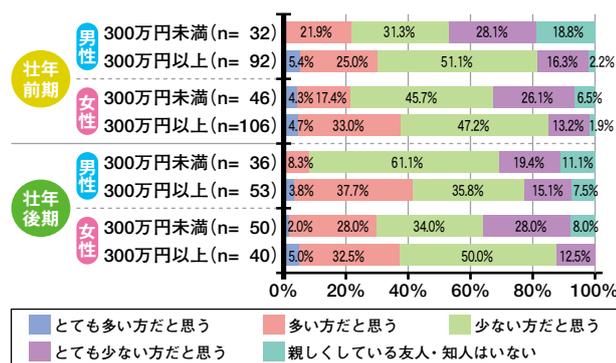


図 46 ●クロス集計 (友人の有無×年収)



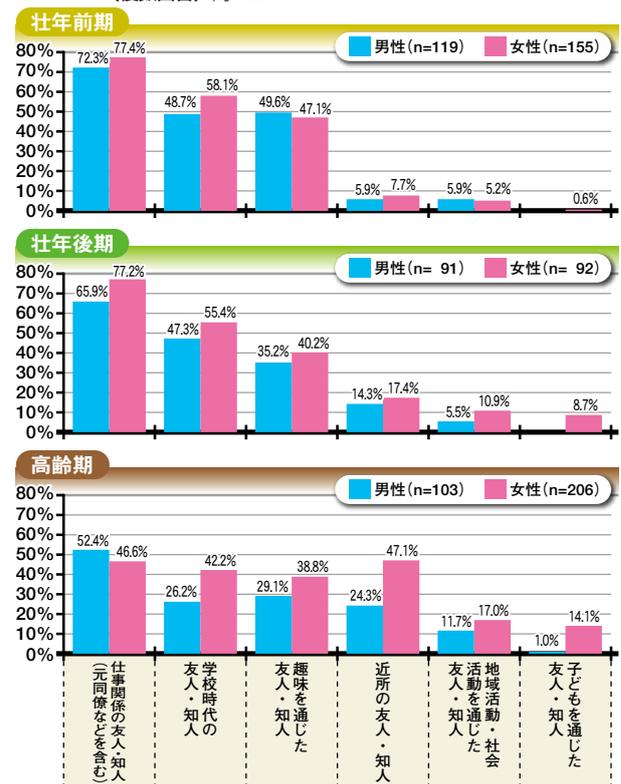
●親しくしている友人・知人 (図 45)

「親しくしている友人・知人はいない」「とても少ない方」の合計は、壮年期では2割から3割近くで、高齢期では女性は2割だが、男性は4割と高い。

●クロス集計 (友人の有無×年収) (図 46)

年収区分別(図 5)にみると、各区分とも「いない」「とても少ない方」の合計は年収300万円未満で高くなり、特に壮年期前期の男性で4割半ばとなる。

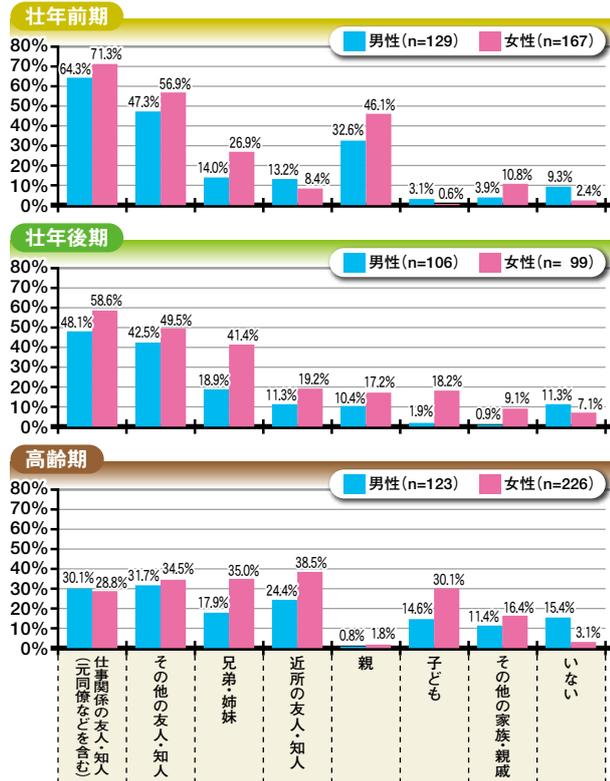
図 47 「親しくしている友人・知人は、どのような方ですか。」(複数回答) 問 12-1



●友人・知人の種別 (図 47)

各区分とも「仕事関係」が高く、壮年期では6割半ばから8割近く、高齢期でも5割前後を占める。「学校時代」「趣味を通じた」も高い。「近所の友人・知人」は壮年期ではわずかだが、高齢期では男性2割半ば、女性5割近くになる。高齢期の女性は「仕事関係」「学校時代」「趣味を通じた」も高く、幅広く交流している。

図 48 「気軽におしゃべりをしたり、気晴らしをできる方はどなたですか。」
(複数回答) 問 13



● おしゃべりや気晴らしできる相手 (図 48)

気軽におしゃべりや気晴らしをできる相手は、壮年期では男女とも、「仕事関係の友人・知人」が最も高く、「その他の友人・知人」が続く。壮年前期では「親」も高い。高齢期では、男性は「その他の友人・知人」「仕事関係の友人・知人」が高く、「いない」は1割半ば。女性は「近所の友人・知人」が最も高く、「子ども」は3割と男性の約2倍。

● 悩みごとを相談できる相手 (図 49)

悩みごとの相談相手は、壮年前期では、「仕事関係の友人・知人」が男性5割超、女性も6割で最も高く、「その他の友人・知人」が続く。壮年後期では、「その他の友人・知人」「仕事関係の友人・知人」が3割超から4割超で高い。高齢期では、男性は「いない」が2割半ばで最も高く、女性は「兄弟・姉妹」が3割超、「子ども」が約3割。各区分とも、男性は「いない」が約2割から2割半ばだが、女性は1割前後と低い。

● 正月に一緒に過ごした相手 (図 50)

壮年前期では、「親」が男性5割半ば、女性6割近くで最も高く、「一人で過ごした」は男性2割半ば、女性2割。壮年後期では、男性は「一人で過

図 49 「日頃、悩みごとを相談できる方はどなたですか。」
(複数回答) 問 14

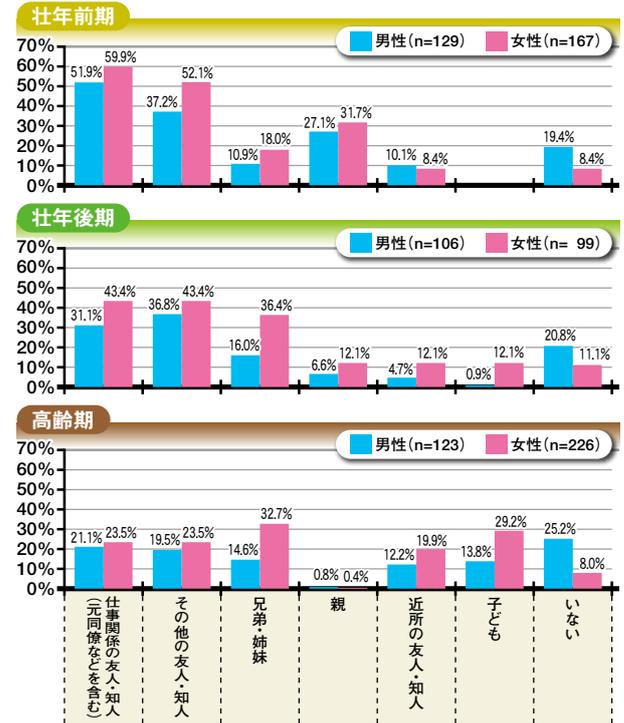
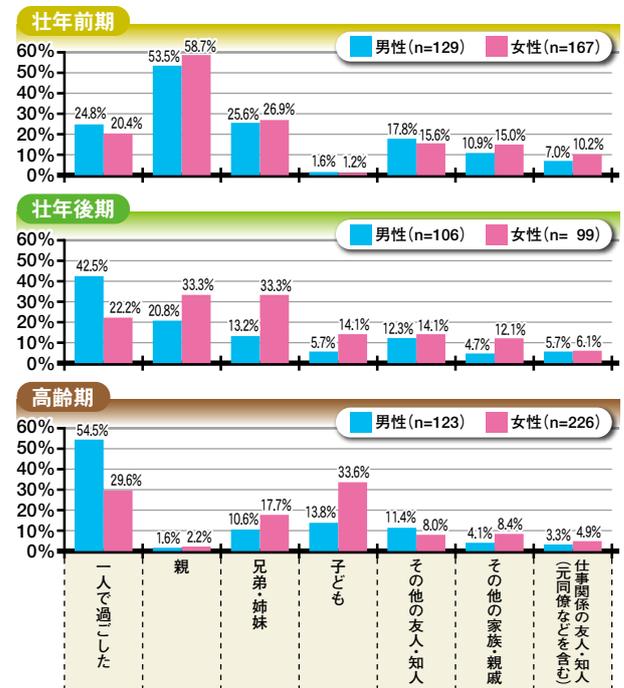


図 50 「今年のお正月(1月1日~3日)にどなたと過ごされましたか。」
(複数回答) 問 15

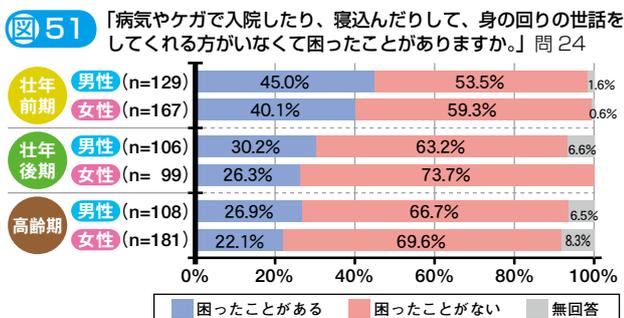


ごした」が4割超で最も高く、女性は「親」「兄弟・姉妹」が3割超で最も高い。高齢期では、男性は「一人で過ごした」が5割半ばを占める。女性は「子ども」が3割半ばで最も高い。

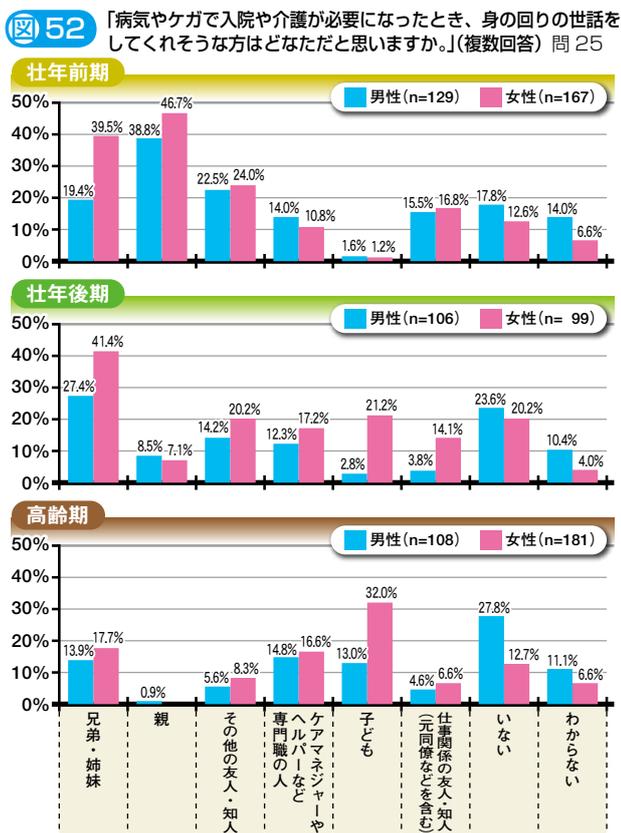
(11) 病気や要介護時に世話をしてくれる人

(3)の「一人暮らしの困った点」で全ての区分で高かったのは、「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」ことで、全体でおよそ半数の人が挙げている。前回の調査では、「世話をしてくれる人はいない」「わからない」の割合が壮年期で高かった。今回は、傾向をより詳細につかむため、年収や子どもの有無、友人の多さなどでクロス集計による分析も行った。

- ・ 病気時に世話をしてくれる人がいなくて困った経験は、未婚者の多い壮年前期で4割以上と高い。
- ・ 世話をしてくれる人が、子ども、兄弟・姉妹などの家族や友人という人は、ほぼ全ての年齢区分で女性の方が高い。世話をしてくれる人が「いない」「わからない」の合計は男性が3割以上で、特に高齢期の男性は4割近くになる。
- ・ 年収300万円未満では男女とも世話をしてくれる人が「いない」「わからない」は高くなり、壮年前期の男性で5割近く、後期の男性で4割超になる。
- ・ 「子どもなし・子どもとの連絡なし」の人は、男女とも世話をしてくれる人が「いない」「わからない」は高くなり、特に高齢期男性で5割近くになる。
- ・ 「友人の少ない・いない」人は、どの年齢区分も世話をしてくれる人が「いない」「わからない」は高くなり、壮年後期の男性で4割超、高齢期の男性で5割と高い。



※図51・52は、高齢期のうち日常の介護が必要な人を除く。



● 病気時に世話人がいなくて困った経験 (図 51)

「困ったことがある」人は、壮年前期で男性4割半ば、女性4割、壮年後期で男性3割、女性2割半ば、高齢期で男性2割半ば、女性2割超と年齢区分が低いほど「困ったことがある」が高い。

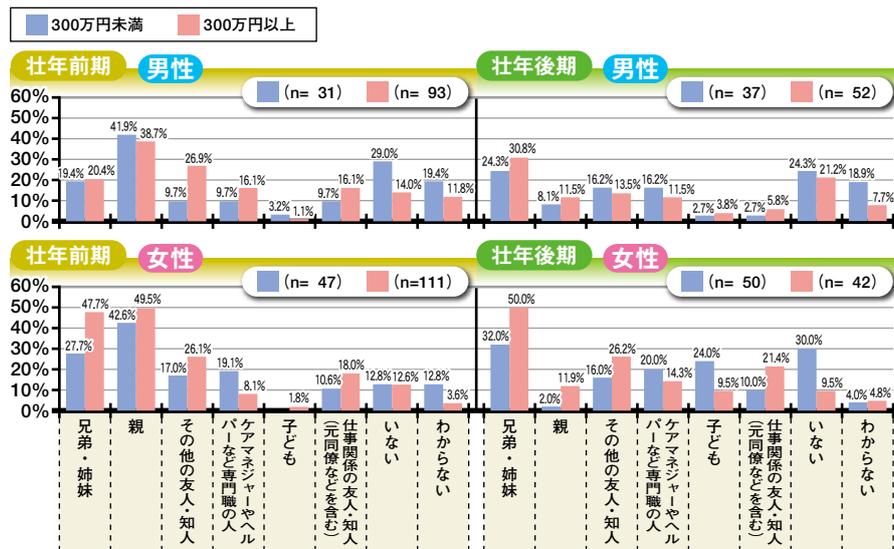
● 病気時や要介護時に世話をしてくれる人 (図 52)

壮年前期では男女とも「親」(男性4割近く、女性4割半ば)が最も高く、男性は「その他の友人・知人」(2割超)が、女性は「兄弟・姉妹」(4割)が続く。壮年後期では、「兄弟・姉妹」(男性3割近く、女性4割超)が最も高く、男性は「いない」(2割半ば)、女性は「子ども」(2割超)が続く。高齢期では、女性は「子ども」(3割超)が最も高い。男性は「いない」(3割近く)が最も高く、「ヘルパーなど専門職の人」(1割半ば)が続く。「いない」「わからない」の合計は、壮年前期では男性3割超、女性約2割、壮年後期では男性3割半ば、女性2割半ば、高齢期では男性4割近く、女性約2割になり、男性は年齢区分が上がるほど高くなり、女性は壮年後期が最も高い。

● クロス集計 (病気時の世話人×年収) (図 53)

年収区分別(図5)で見ると、年収300万円未満では、各区分とも「いない」「わからない」の合計が高くなり、壮年前期の男性では5割近く、後期の男性では4割を超える。壮年後期の女性も3割半ばと高い。一方、「兄弟・姉妹」「その他の友人」「仕事関係の友人」は割合が低くなる。

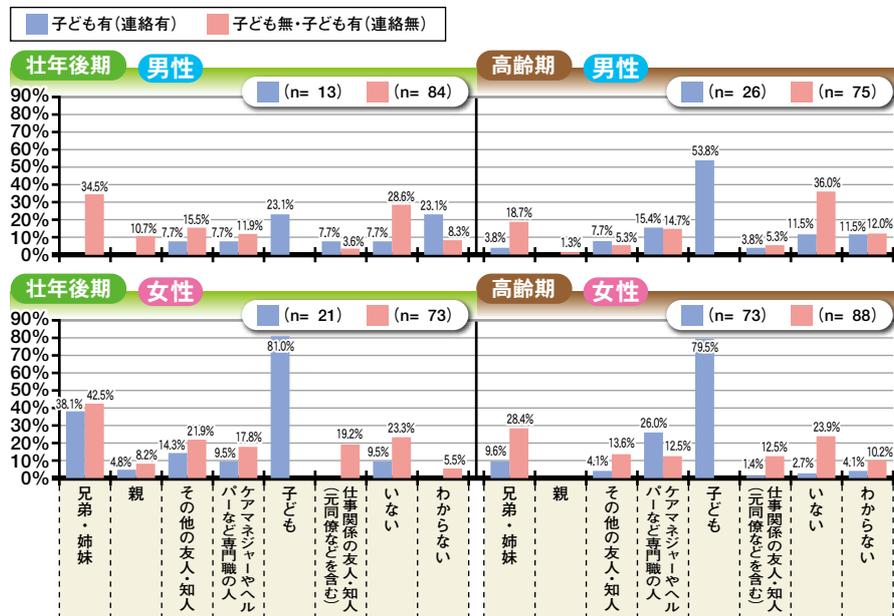
図53 ●クロス集計 (病気時等に世話をしてくれる人×年収)



●クロス集計 (世話人×連絡のある子ども) (図54)

壮年後期と高齢期で、子どもがいない人と「子どもほとんど・まったく連絡をとっていない」人の合計と、連絡のある子どもがいる人(図39)とでみると、世話をしてくれる人が「いない」「わからない」の合計は、連絡のある子どもがいない人は、壮年後期は男性3割半ば、女性3割近く、高齢期は男性5割近く、女性は3割半ばと、連絡のある子どもがいる人と比べて非常に高くなる。

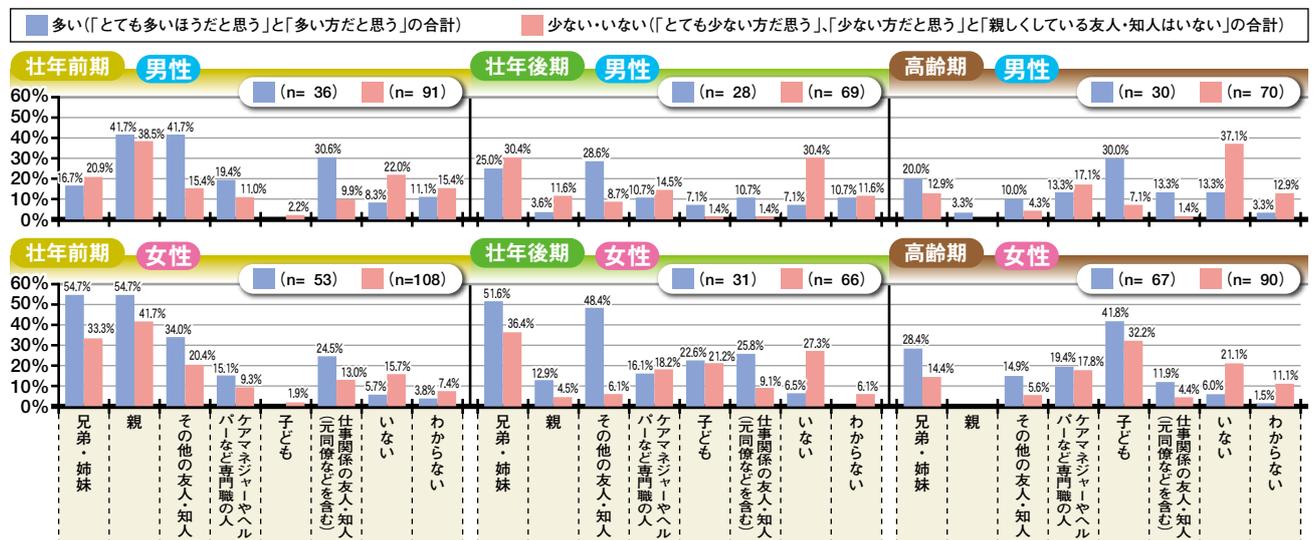
図54 ●クロス集計 (病気時等に世話をしてくれる人×連絡のある子どもの有無)



●クロス集計 (世話人×友人) (図55)

友人の多さ(図45)からみると、各区分とも世話をしてくれる人が「いない」「わからない」の合計は、友人が「少ない・いない」人が「多い」人より非常に高く、特に壮年後期の男性は4割超、高齢期の男性では5割を占める。一方、友人が「多い」人は、「その他の友人・知人」「仕事関係の友人・知人」の割合が、特に壮年期で高い。

図55 ●クロス集計 (病気時等に世話をしてくれる人×友人の有無)

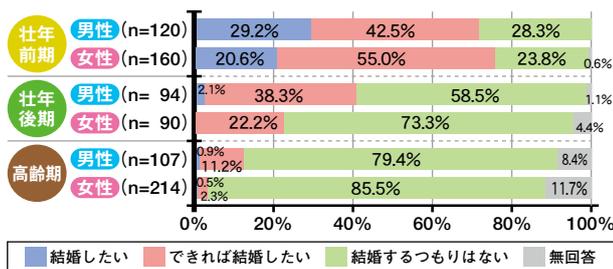


(12) 結婚

昨年度の調査から、新宿区の18歳～49歳の未婚者は、「いずれ結婚するつもり」の人が全国に比べて低く、特に男性で顕著であること、また、未婚の理由として男性は「収入面の不安」、女性は「適当な相手が見つからない」という人が多いことがわかった。では、一人暮らしの非婚者（未婚・離別・死別）の結婚意向はどうなのだろうか。また結婚したくない理由は何なのだろうか。

- ・単身者の結婚の意向は、壮年前期では男女とも「結婚したい」「できればしたい」の合計は7割以上だが、壮年後期では男性は4割、女性は2割超と大きく下がる。「結婚したい」は男性は「45～49歳」、女性は「40～44歳」で大きく下がる。
- ・壮年前期の非婚者の結婚意向を年収別でみると、男性は年収300万円未満で「結婚するつもりはない」が4割半ばと、300万円以上よりかなり高くなる。
- ・「結婚するつもりはない」は、男性の「暮らし向きが苦しい」かつ「仕事に充実感を感じない」で高く、女性は「ゆとりがある」かつ「仕事に充実感を感じる」で高くなる。
- ・壮年期の結婚したい理由は、どの区分とも「精神的に安定する」「好きな相手と一緒にいたい」が高く、男性は「病気時の世話」「子どもを持ちたい」が、女性は「老後の安心感」「経済的に安定」が高い。
- ・結婚するつもりがない理由は、どの区分とも「一人でいる方が気楽」「結婚する必要性を感じない」が高いが、「必要性を感じない」は特に女性で高く、「収入面に不安がある」は男性で高い。

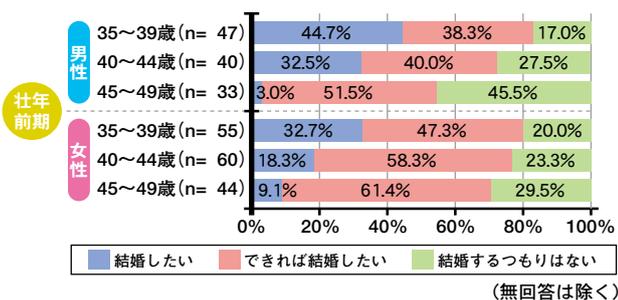
図56 「ご自身の結婚についてどう考えていますか。」問36-1



●結婚意向 (図56)

「結婚したい」「できれば結婚したい」の合計は壮年前期では男性7割超、女性7割半ば。壮年後期では男性が4割、女性が2割超と低くなり、高齢期では男性1割超、女性はごくわずかとなる。

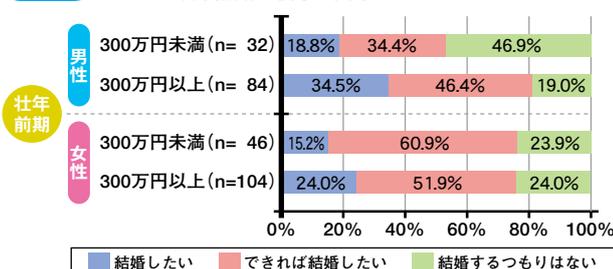
図57 「ご自身の結婚についてどう考えていますか。」(5歳別)



●結婚意向 (壮年前期5歳別) (図57)

壮年前期の結婚意向を5歳別にみると、35～39歳では、「結婚したい」は男性が4割半ば、女性が3割超だが、40～44歳になると男性が3割超、女性が2割近くと低くなり、45～49歳になると男性はごくわずか、女性は約1割になる。「結婚するつもりはない」は、45～49歳では男性4割半ば、女性3割を占める。45歳以降の男性は結婚意向が著しく低くなるのがわかる。

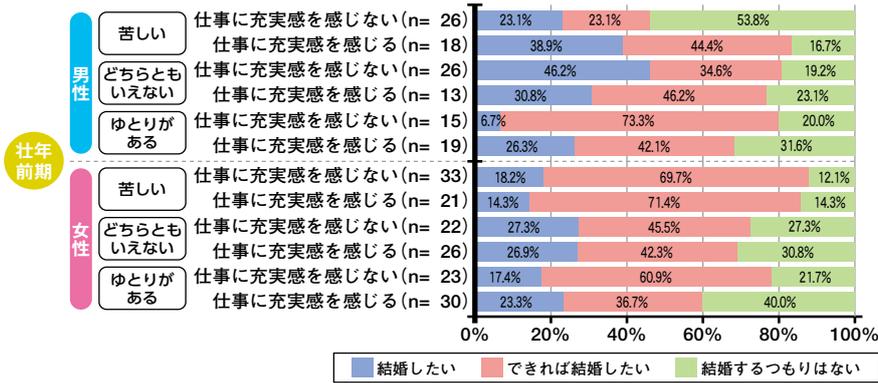
図58 ●クロス集計(結婚の意向×年収)



●クロス集計 (結婚意向×年収) (図58)

壮年前期の結婚意向を年収区分別(図5)にみると、「結婚するつもりはない」は男性の年収300万円未満では4割半ば、300万円以上では約2割と大きな差が出る。しかし、女性はほとんど差がない。「収入面の不安」が男性の結婚意向を低下させているのがわかる。

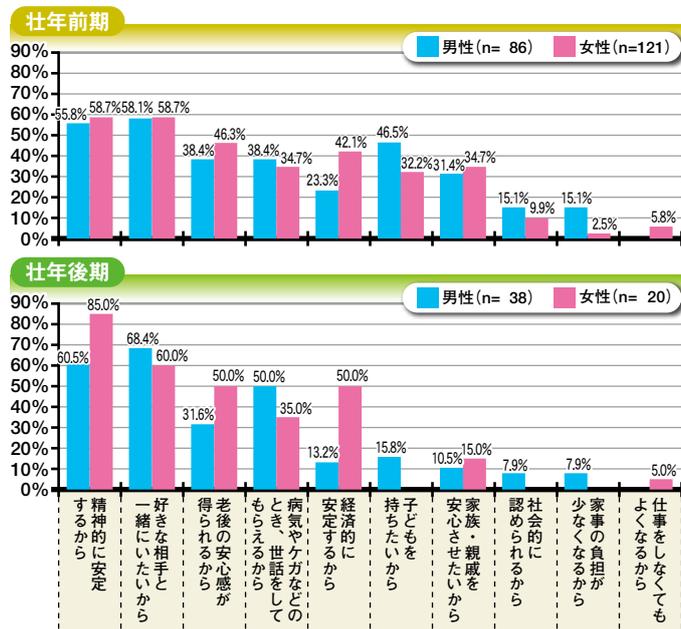
図59 ●クロス集計(結婚の意向×暮らし向き×仕事の充実感)



●クロス集計(結婚×暮らし向き×仕事の充実感)(図59)

壮年前期の結婚意向を「暮らし向き」と「仕事の充実感」(図25)でみると、「結婚するつもりはない」は、男性の暮らし向きが「苦しい」(「やや苦しい」「大変苦しい」)かつ「仕事に充実感を感じない」(「仕事に打ち込んでいるときに充実感を感じる」に非該当)で5割半ばと非常に高い。一方、女性は「ゆとりがある」(「大変ゆとりがある」「ややゆとりがある」)かつ「仕事に充実感を感じる」が4割と高く、「苦しい」人の約3倍にもなる。

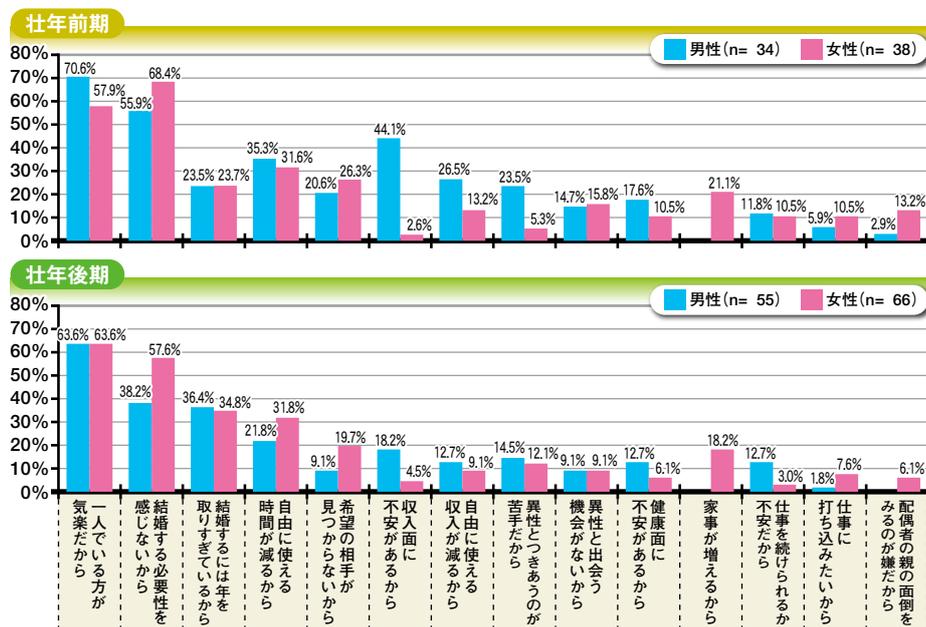
図60 「結婚したいと思う理由はどれですか。」(複数回答) 問36-2



●結婚したい理由(図60)

各区分とも、「精神的に安定するから」と「好きな相手と一緒にいたいから」が高く、特に、「精神的に安定する」は、壮年後期の女性が8割半ばと著しく高い。「子どもを持ちたいから」が壮年前期の男性で4割半ばと女性(3割超)よりかなり高い。「老後の安心感」「経済的に安定する」は女性、特に壮年後期の女性で高く(各5割)、「病気やケガなどのとき、世話をしてもらえるから」は壮年後期男性で5割と高い。

図61 「結婚するつもりがないと思う理由はどれですか。」(複数回答) 問36-3



●結婚するつもりがない理由(図61)

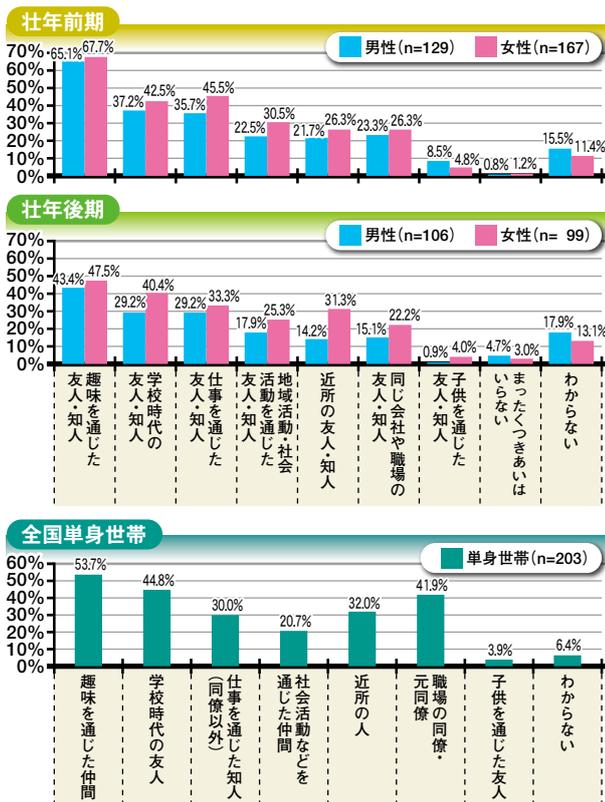
各区分とも、「一人の方が気楽だから」と「結婚する必要性を感じないから」が高いが、「必要性を感じない」は女性の方が高い。「収入面に不安があるから」は特に壮年前期の男性で4割半ばを占め、女性より著しく高い。また、「異性につきあうのが苦手」も壮年前期の男性で2割半ば。

(13) 高齢期への備え

これから高齢期を迎える壮年期の一人暮らしの人は、将来、高齢期になったときの自身のことをどのように考え、準備をしている、あるいはしていないのだろうか。内閣府が行った全国調査の結果とも比較しながら分析を行う。

- ・ 高齢期につきあいたい友人・知人は、どの区分も「趣味を通じた」が最も高く、「学校時代」「仕事を通じた」も高い。「地域活動」や「近所」の友人・知人は、現状のつきあいよりかなり高くなっている。全国調査と比べると、「職場」の友人・知人が低く、「わからない」が高い。
- ・ 近所の人との望むつきあいは、特に「困ったときに助け合う」が現状のつきあいより著しく高くなっている。全国調査と比べると、全体的に低いと同じ傾向にある。
- ・ 高齢期の生活に対し、男性のおよそ6割、女性のおよそ7割が、不安を感じている。不安を感じている割合は、全体では全国調査（8割半ば）より低い。
- ・ 不安を感じることは、どの区分とも「健康」「収入」「介護」が高く、壮年前期では「頼れる人がいなくなる」、後期の女性では「自然災害」も高い。
- ・ 高齢期の経済的な備えが、「かなり足りない」と感じる割合は、壮年前期では5割以上、壮年後期では3割台で、全国調査（6割近く）より低い。
- ・ 高齢期の生計を支える収入は、壮年前期では半数以上が「給与収入」を望んでいる。
- ・ 高齢期に望む住まい方は「高齢者専用施設・住宅」や「シェアハウスなど」が女性で比較的高い。

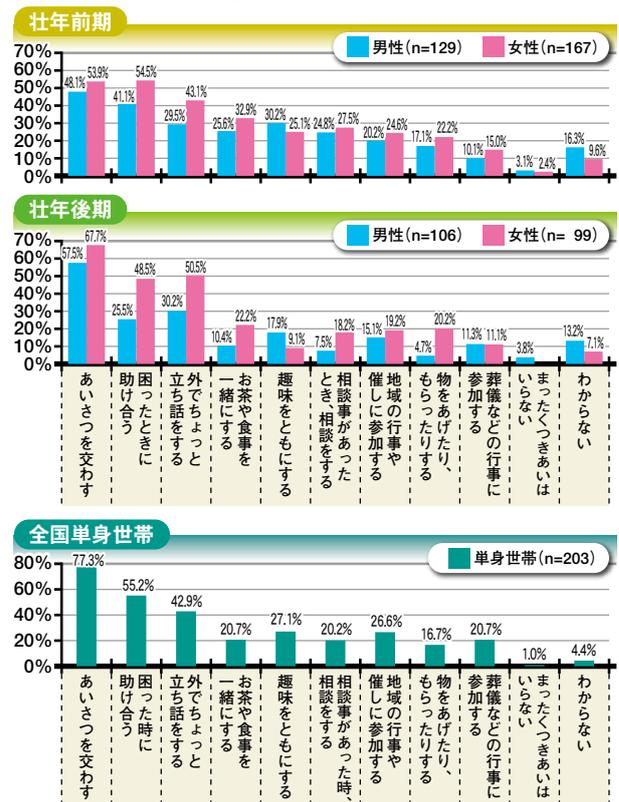
図 62 「高齢期において、どのような友人・知人とのつきあいを望みますか。」(複数回答) 問 30



● 高齢期に望む友人とのつきあい (図 62)

各区分とも「趣味を通じた友人・知人」が最も高い。壮年後期の女性では「近所の友人・知人」が特に男性と比べて高い。現状のつきあい (図 47) と比べると、「仕事を通じた」と「学校時代」は低くなるが、その他はほぼ高くなる。

図 63 「高齢期において、近所の方との程度のどの程度のつきあいを望みますか。」(複数回答) 問 31



● 高齢期に望む近所づきあい (図 63)

各区分とも現状の近所づきあい (図 42) と比べて、「困ったときに助け合う」「立ち話をする」が高くなっている。「まったくつきあいはいらない」は各区分ともごくわずかである。

図 64 「高齢期の生活について不安を感じますか。」問 32

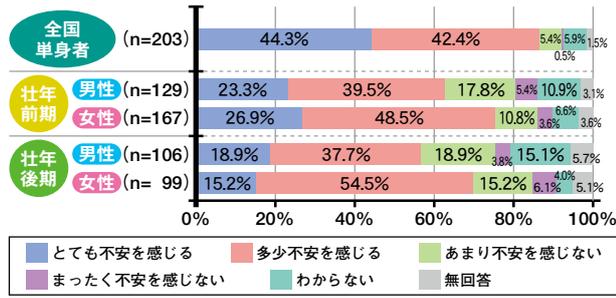
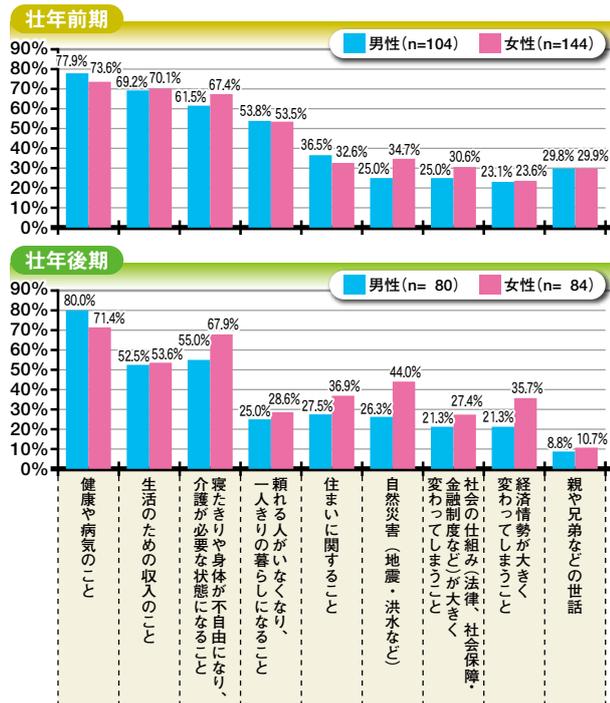


図 65 「高齢期の生活に不安を感じるのは、どのようなことですか。」(複数回答) 問 32-1



● 高齢期の生活への不安 (図 64)

「とても不安を感じる」「多少不安を感じる」の合計は、男性は壮年前期で6割超、後期で5割半ば。女性は壮年前期で7割半ば、後期で7割で、女性の方が不安を感じる度合いは高い。また、全体では全国調査結果(8割半ば)よりも低い。

● 高齢期における不安の内容 (図 65)

各区分とも「健康や病気」「生活のための収入」「介護が必要な状態」が高い(5割超~8割)。また、壮年前期では「頼れる人がいなくなる」が男女とも5割半ばを占める。

● 高齢期への経済的な備え (図 66)

「かなり足りない」が壮年前期では男性5割半ば、女性5割と高いが、壮年後期では男性3割半ば、女性3割超と低くなる。「かなり足りない」は、全国調査結果(6割近く)より低い。

図 66 「ご自身の高齢期への経済的な備えについて、どのように感じていますか。」問 33

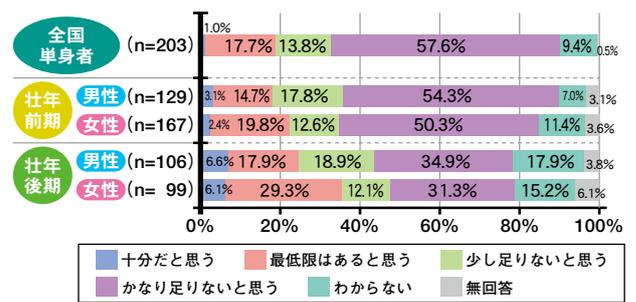


図 67 「高齢期の生計を支える収入を何によって得たいと思いますか。」(複数回答) 問 34

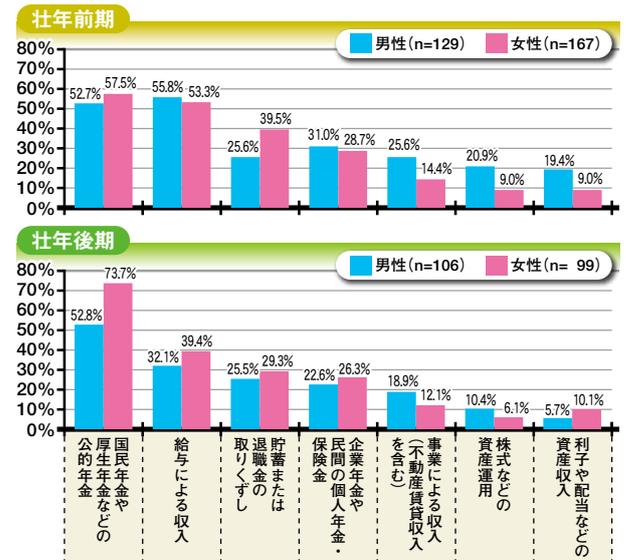
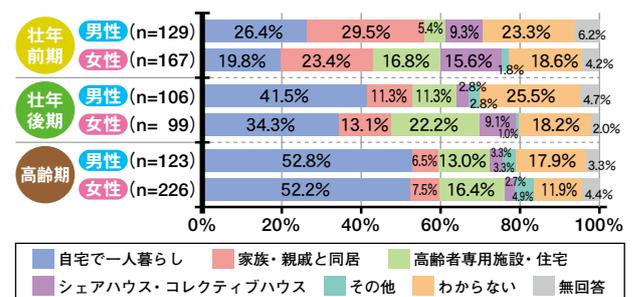


図 68 「高齢期においてどのような住まい方を望みますか。」問 35



● 高齢期の生計を支える収入源 (図 67)

壮年前期ではほぼ5割半ばが「給与収入」を望み、男性は「公的年金」を上回る。壮年後期では「公的年金」が最も高いが、男性は女性に比べてかなり低い。

● 高齢期に望む住まい方 (図 68)

「自宅で一人暮らし」が壮年前期は2割前後、後期は4割前後、高齢期は5割超と、年齢区分が上がるほど高い。「高齢者専用施設・住宅」「シェアハウスなど」は女性の方が高い。

(14) 高齢期の生活

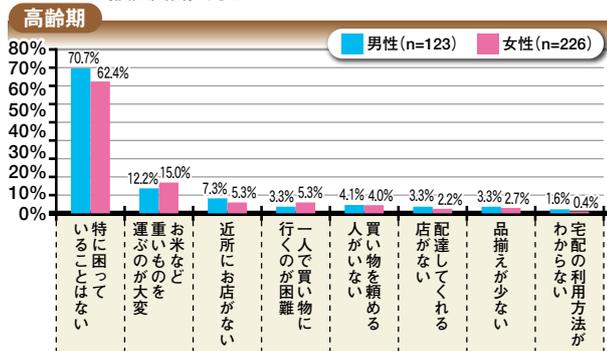
高齢期の単身者は年齢とともに健康状態が悪くなり、介護や生活の支援を必要とすることが増えてくる。外出することが困難になり、普段の買い物をするのも難しくなることも考えられる。一方、高齢期でも仕事をしている人が多い。そのような視点から、高齢期の生活と意識についてうかがった。

- ・ 高齢単身者が普段の買い物で困っていることは「特にない」が最も多い。
- ・ 外出の頻度は、「ほぼ毎日」が最も高く、「ほとんど外出しない」人は非常に少ない。外出時に困っていることは「特にない」が最も高いが、「体が疲れやすい」も比較的高い。
- ・ 男性の3人に1人、女性の4人に1人が収入のある仕事をしており、働く理由は男女とも「生活資金のため」が最も高く、女性は「生きがいがあるから」が男性より高い。

要介護度の高い高齢単身者は意識調査に回答することも難しい。今回の回答者359人のうち「日常生活を送るのに介護を必要とする」と答えた人は13.1%であった。その人を介護をしている人は、子どもが27.7%、ヘルパーなど専門職の人が53.2%で

あった。また、要介護認定を受けている人は16.4%で、そのうち要介護度1～5は25.5%であった。今回の調査の回答者は比較的自立している人が多いと想定される。それを踏まえての調査結果である。

図69 「普段の買い物で困っていることはどのようなことですか。」(複数回答) 問20



● 買い物の困りごと (図69)

買い物には「特に困っていることはない」が男性約7割、女性6割超で著しく高く、「お米など重いものを運ぶのが大変」が1割以上で続く。

● 外出頻度 (図70)

男女とも「ほぼ毎日」が最も高く、男性は65～74歳で約5割、75歳以上で約4割、女性はそれぞれ4割近く、3割近くと、特に男性の外出頻度が高い。

● 外出時の問題点 (図71)

「特にない」が5割前後で最も高く、「出かけるのと体が疲れやすい」が2割台で続く。

● 仕事をしている理由 (図72)

男性の3割半ば、女性の2割半ばが収入のある仕事をしている(図3)。仕事をしている理由は、「日々の生活資金を得るため」が6割前後で最も高い。特に女性は「生きがいがあるから」が男性より高く、「自由に使えるお金がほしいから」は男性の方が高い。

図70 「普段、どの程度外出しますか。」 問21

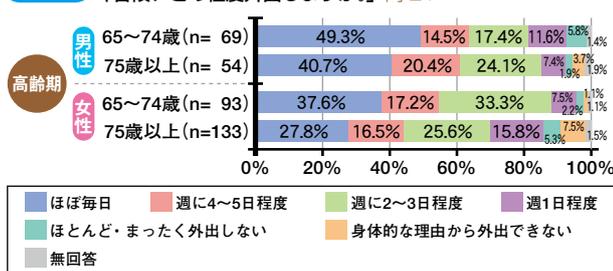


図71 「外出するときに問題だと思うことは何ですか。」(複数回答) 問23

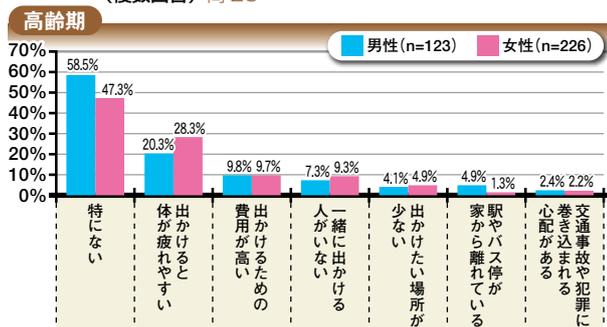
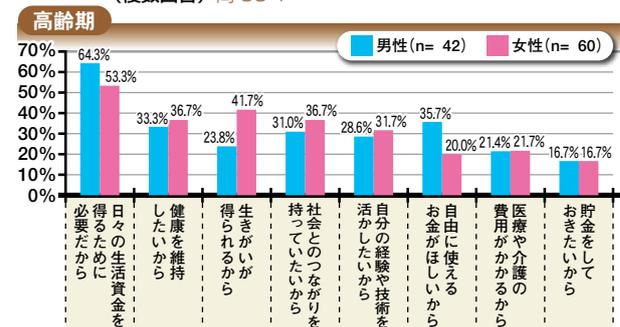


図72 「現在仕事をしているのは、どんな理由からですか。」(複数回答) 問39-1

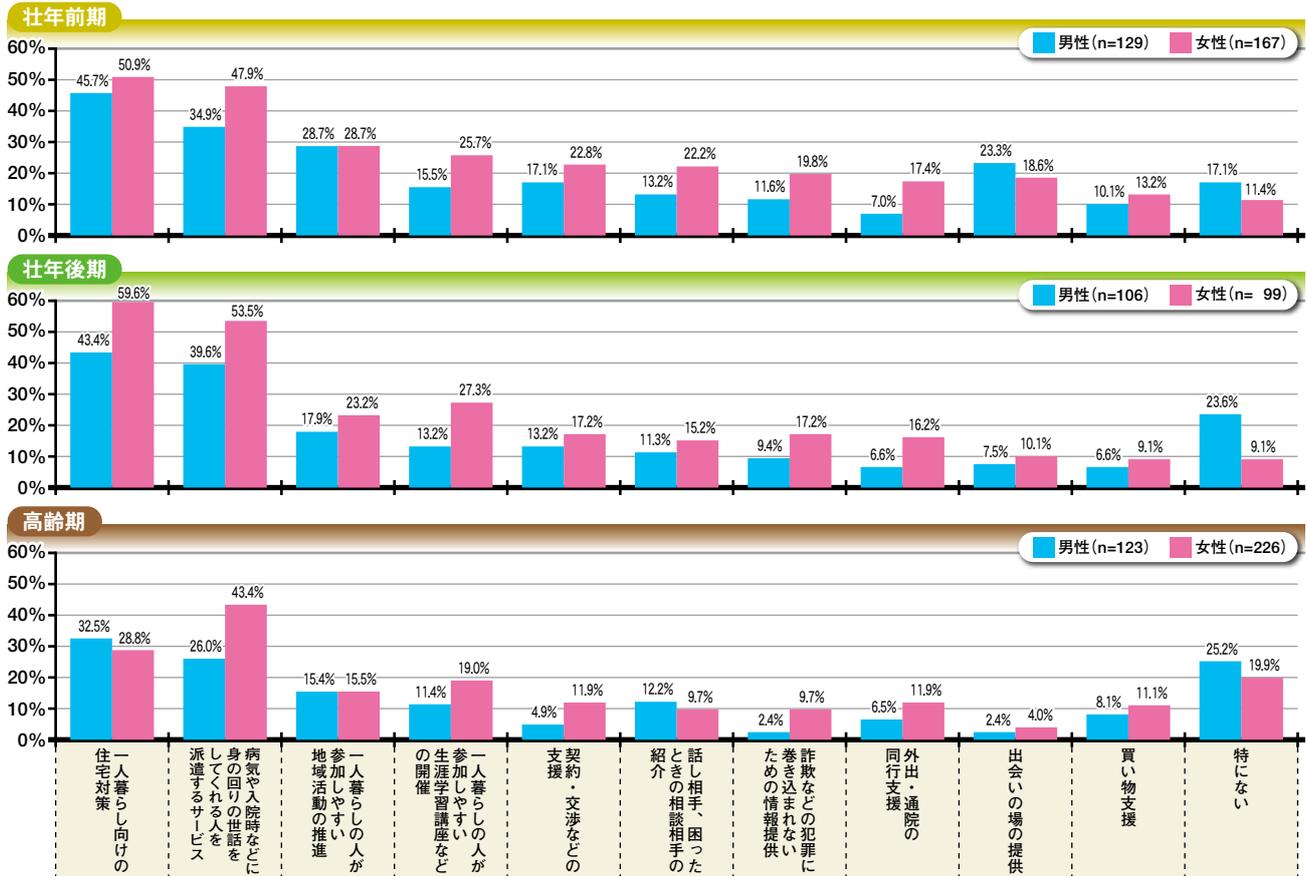


(15) 区政への要望

これまで、一人暮らしの生活や意識の実態についてみてきたが、一人暮らしは良い面もあるが困ったことや不安なことも多いことがわかる。区に力を入れてほしい一人暮らし向けの施策やサービスについてうかがった。

- ・区に求める一人暮らし向けの施策やサービスは、各区分とも「住宅対策」と「病気時に世話をしてくれる人を派遣するサービス」が最も高く、一人暮らしの人が参加しやすい「地域活動の推進」や「生涯学習講座」も高くなっている。ほかに、壮年前期では「出会いの場の提供」が男性で比較的高い。「特にない」は、壮年後期の男性と高齢期で高くなっている。

図 73 「一人暮らし向けの施策・サービスとして、区に力を入れてほしい取り組みはどれですか。」
(複数回答) 問 37



●望む一人暮らし向け施策・サービス (図 73)

各区分とも「一人暮らし向けの住宅対策」と「病気や入院時などに身の回りの世話をしてくれる人を派遣するサービス」が共通して高い。

各区分で2割以上の方が要望している施策・サービスは、壮年前期では、男性は「住宅対策」(4割半ば)、「世話人派遣サービス」(3割半ば)のほか、「一人暮らしの人が参加しやすい地域活動の推進」(3割近く)、「出会いの場の提供」(2割超)などが高い。女性は、「住宅対策」(約5割)、「世話人派遣サービス」(5割近く)のほか、「地域活動の推進」(3割近く)、「一人暮らしの人が参加しやすい生涯学習講座の開催」(2割半ば)、「契約・交渉などの

支援」(2割超)、「話し相手、困ったときの相談相手」(2割超)などが高い。

壮年後期では、男性は「住宅対策」(4割超)、「世話人派遣サービス」(4割)が高く、「特にない」も2割半ばと高い。

女性は、「住宅対策」(6割)、「世話人派遣サービス」(5割半ば)のほか、「生涯学習講座」(3割近く)、「地域活動の推進」(2割超)も高い。

高齢期では、男性は「住宅対策」(3割超)、「世話人派遣サービス」(2割半ば)の他「特にない」が2割半ばと高い。女性は、「世話人派遣サービス」(4割超)と「住宅対策」(3割近く)が高い。

(16) 自由意見

最後に、新宿区で一人暮らしをしていて、困っていることや将来不安に感じることに、必要だと思うサービスなどを具体的に記載してもらった。代表的な意見や興味深い意見を抜粋して、年齢区分ごとに示す。

壮年前期(35～49歳)

●病気・介護

<40代女性>

ケガをして、半身動かない状態になり、食事、入浴、掃除などの日常生活が送れなくなった。近くに介護施設があるが、65歳未満ということで一切助けてもらえない。仕事は解雇が怖くて無理して復帰せざるを得なかった。あまりに65歳未満に冷たい制度だ。

<40代女性>

将来の不安は、病気になり、身体が自由がきかなくなったときに生活支援が受けられるかどうかということ。買い物、見守りサービス、病院への付き添いサービスなどの社会的支援を望む。

<30代女性>

セキュリティの高いマンションに住んでいるので、急病で倒れ、救急車を呼んでも、自分でインターフォンに応答して開錠しないと、救急隊員が自分の部屋の階に入って来られないことが心配。

●住宅・居住

<40代女性>

賃貸住宅に住んでいるので、定年退職後に住む所がどうなるのがとても不安。保証人が必要なことも多く、周りに頼れる人がいないと住居を確保することが難しい。

<40代女性>

新宿区は利便性がよいが、部屋の広さの割に家賃が高い。新宿区に住むメリットを大きく打ち出してほしい。子育て支援もよいが、単身者支援もしてほしい。

<30代女性>

新宿は便利すぎて離れたくないが、結婚して家を購入することを考えると、金銭的に住めるかどうか分からない。

<30代女性>

50代、60代になったときが不安。同世代の友人は独身で子どもがいない者同士なので、将来はシェアハウスや少しグレードの高い老人ホームに入ろうと言っている。独身者同士がつきあい続けられるような住宅支援を望む。

●収入・仕事・生活

<40代女性>

将来、失業して収入がなくなることが不安。年金だけで暮らせるか、また、その年金を受けられる年齢までどのように収入を得ればよいのか。貯蓄するにしても、非正規雇用の不安定な状況では先の見通しが立たない。

<40代女性>

新宿区での生活にはとても満足しているが、家賃や物価が高く、貯蓄ができない。将来、国民年金だけでは生活できないし、住居は賃貸なので、このまま新宿区で生活ができるのかとても不安。結婚も含め、将来的なことを真剣に考えなくてはと日々思っている。

●安全・安心

<40代女性>

一人暮らしだと、盗難被害など、いつ怖い目にあうかと不安である。

<40代女性>

災害時に避難所で生活するとなったとき、知り合いがまったくいないので不安。

●地域や人とのつながり・社会参加

< 40代男性 >

親や兄弟は地方に住んでおり、折り合いが悪い
ため、基本的に連絡や相談をしていない。独身な
ので、生活も仕事も不安定で人づきあひもない。
40代独身男性が自治会の活動に参加できるわけ
でもなく、ボランティアにも参加しづらい。

< 30代女性 >

近所の交流がない。同じマンションの人とあ
いさつはするが、顔は覚えていない。近所の同
世代の人と知り合えるきっかけがあればよい。
近所で交流があり、友人や知り合いができれば、
何かあったときに安心だ。

< 40代女性 >

退職後のコミュニティをつくるため近所づき
あひをしたいが、子どもはなく、平日は家にい
ないので、なかなか近所づきあひができない。
ボランティア、町会活動などの案内が手軽に入
手できるとよい。

< 30代女性 >

孤独死の不安がある。新聞配達の人が見回り
を兼ねる工夫や、近所の人とコミュニケーション
の機会を持つことが必要だと思う。

< 30代女性 >

一人が寂しくなったときにふらっと立ち寄り
る場所がないことに困っている。地域活動も初
めて参加するにはハードルが高いので、気楽に
受け入れてくれる寛容さがあればよい。

< 40代女性 >

シルバー世代になったときに社会参加する機
会やアルバイトがあるのかどうか。友人も次々
と亡くなり、孤独な一人暮らしをしている父の
姿を見ると、毎日に張りのある趣味を持つこと
や社会参加することが大切だと思う。

●結婚

< 40代女性 >

基本的に社会の保障は家庭が優先であり、独
身に対するサポートはほとんどない。「それが嫌
ならば結婚しろ」という目線が、女性にとって
「結婚は縛るもの」という意味でしかなく、「結
婚＝幸せ」とはならないことが晩婚化や出生率
を下げているのでは。

< 40代女性 >

事実婚の人も多くいるのに、パートナーが手
術するときに承諾書を書くことも認められな
い。時代に合った行政システムを望む。

< 30代女性 >

行政が婚活支援すべきかどうかの論議はある
が、「住民を幸せにする」という側面から、若年
層の支援策の一つとして実現してもらいたい。
中高年や子育てに重点が置かれがちなか、この
ような単身者に焦点を当てた論議があることが
とてもうれしい。

●必要なサービス

< 40代男性 >

40歳過ぎで家族のいない人の肩身はどこで
も狭い。このまま結婚できなければ、暮らしは
先細り、最後は寂しい高齢期になると思う。家
族のつながり、地域のつながりが失われたこと
にも原因があり、区が低額な婚活パーティーを
行ってほしい。また、自治会や地域活動に独身
の35歳以上を過ぎた人でも参加しやすくなる
よう働きかけてほしい。

< 30代男性 >

新宿に一人で住む人は、普通に住居として住
む以上の利点や理由があって住んでいる。行政
は地域活動の参加などではなく、アートや仕事
の支援に力を入れてほしい。24時間活動でき
る街として、またそこから帰れる場所として、
安心できる治安と利便性がほしい。

< 40 代女性 >

平日の朝早くから夜まで仕事に出ている。一人暮らしのため、休日や夜間に区のサービスが受けられる制度や設備が充実することを期待する。

< 40 代女性 >

生涯学習講座に遅い開始時間の講座を設けてほしい。現状は主婦には優しく、独身者には冷たい気がする。

< 40 代女性 >

将来、年金には頼れず、生涯未婚も視野に入れると、一生働いて収入を得ていきたい。仕事のある、健康でいられるためのサービスなど働ける環境づくりの充実を望む。

< 30 代男性 >

区が行っているサービスの情報が少ない。積極的にサービスを受けようとする人は自ら情報を得ようとするが、大半の人は受身であり、高齢者など情報の入手方法に疎い人が多い。

●その他

< 40 代女性 >

質問の内容がとても興味深く感じられた。新宿区がこれからも魅力ある街であってほしい。

< 30 代女性 >

一人暮らしの不安を共に考えてくれる新宿区に住めてよかった。

壮年後期(50～64歳)

●病気・介護

< 50 代女性 >

今は健康だが、病気になって働けなくなったときの収入が不安。高齢になったとき、介護状態になったとき、誰が面倒見てくれるのか。高齢者向けの便利帳があればよい。

< 60 代女性 >

今は仕事に明け暮れているので、将来について深く考えているわけではないが、地方にいる寝たきり状態の父の様子を知るにつけ、自身の将来に不安がよぎる。

< 60 代男性 >

今は一人が気楽だが、将来、高齢期になり、家にいる時間が長くなったり、体が不自由になったりすると、周囲の目が気になり、どう思われているか不安になるかもしれない。

●住宅・居住

< 60 代女性 >

マンション入居の際、現役で仕事をしており、保証人もいるのに、ただ60歳を過ぎているというだけで入居を断られたときはショックだった(交渉の末、入居)。

< 50 代女性 >

定年退職後も現在の家賃を払って生活するのは難しいと思うが、新宿は地価が高いのでマンションを購入するのも難しい。今ある人間関係の基盤を考えなければ、地方に家を買って住むことも選択肢の一つ。

< 50 代女性 >

住宅問題が不安。年をとると「生活の便利さ」が一番であり、どうしても都心に住みたい。現在は40㎡弱で家賃10万円超もする古いマンション住まいなので、家賃を払うために働いている感が否めない。

< 50 代男性 >

不安は、住居の賃貸契約や入院したときの保証人がいないこと。

< 50 代女性 >

安心して最後を迎えるためには、やはり住宅問題が一番不安。非正規雇用なので、雇用の継続も含め収入の増加が見込めず、年金だけでは公団などは家賃が高くて入居できない。

●収入・仕事・生活

<年齢・男女不詳>

家賃が高いために無理して働いている面もある。貯金はなく、これからどうしていくか心配。東京は働くところは多いので、住まいが確保できれば、上京してくる若者にとっても素晴らしい街になるだろう。

<50代女性>

もうすぐ仕事がなくなり、収入がゼロになる。60歳を過ぎての再就職はとても難しく、どのように生活していったらよいかとても不安。

<50代女性>

収入も少なく、契約社員のため、いつまで就業できるかわからない。仕事が終わるのも遅いので遠い地域には住めないし。

<60代女性>

将来の不安は、死亡後の葬儀と墓地の問題。

●地域や人とのつながり・社会参加

<60代女性>

今は健康で働いているが、親や兄弟姉妹もなく、一人で生きてゆくだけ。結婚は全然する気もなかったの、後悔はしていない。賃貸なので、亡くなったとき素早い対応を区がとってくれと助かる（火葬など）。

<50代男性>

家族がないため、家庭を持っている友人や知人がいつまでつきあってくれるか不安。

<50代女性>

ボランティアや社会活動に参加したいが、シフト勤務のため、土日・祝日は参加できない。

●必要なサービス

<60代男性>

定期的に携帯電話などに電話やメールで「急病など困ったことはないか」を確認してくれるサービスがあるとよい。

<50代女性>

何となく見守られていると感じるものから手厚い支援まで、その人に合わせたサービスが必要。一人暮らしの人たちをサポートする楽しい企画や、地域の役に立っていると感じられる高齢者に寄り添うサービスを望む。

<50代女性>

突然死や急病時が不安。これからはネット環境を使える老人も多くなるので、毎日ネットを通じて「生存確認」をしてほしい。

<50代男性>

親戚がないので入院時の保証人がいない。区で直接または保証サービス機関などを紹介してほしい。

<50代女性>

大きな家具を粗大ゴミに出すような力仕事のとかが困る。有料でよいので、信頼できる人を派遣してくれる制度があればよい。

<60代女性>

各自治会などにコミュニティコーナーがあり、スタッフがいて、相談事が細やかにできたら気が楽だと思う。デイサービスのように一人で遊びに行ける場がほしい。

高齢期(65歳以上)

●病気・介護

<70代女性>

病気やケガをしたときのことが不安。子ども達に迷惑をかけずに生活できるよう、日頃からリハビリに通い、健康に注意している。

<80代女性>

足が不自由で外出できず、左目もほとんど見えない。子どもはなく、ヘルパーさんが週2回掃除などに来てくれる。他区に住む80代の弟も買物や話し相手をしてくれるが、弟も病気を抱えている。病気になったらどうなるのか不安でいっぱい。

< 80代男性 >

病気と介護のことが一番心配。病気のときは、夜、病院へ連れていってもらおうなど近所の友人に助けてもらっている。

< 80代女性 >

急病のときに電話連絡できるよう携帯電話をそばに置いておくようにしているが、時々、どこに置いたのかを忘れてしまう。

< 70代女性 >

結婚したことがなく、子どももない。姉が頼りになるが、高齢のため身の回りの世話を頼むことはできない。手術のときに承諾書を誰に頼めばよいのか。死後の手続きはどうすればよいのか。深刻に不安を感じている。

< 80代女性 >

一人暮らしが長く、子どももない。病気になり、入院したら一体どうなるのかを考えると毎日がとても不安。

●住宅・居住

< 70代女性 >

賃貸住宅に住んでいるが、一番困っているのは家賃が年金の4分の3にもなること。貯金を切り崩して補っているが、住宅費のことを心配せずに暮らしていきたい。

< 80代男性 >

住宅の契約更新時の保証人が見つからずに困っている。家賃が高く、公営住宅にも入居できず、収入も年金のみなので大変だ。

< 80代女性 >

住宅のことで困っているが、高齢者には引っ越すところがない。都営・区営住宅も30年以上申し込んでいるが入居できない。

< 60代女性 >

今は大きな病気もなく、何とか生活しているが、先のことを考えると不安になる。低所得者でも入居できる単身住宅があると安心。

●収入・仕事・生活

< 70代女性 >

国民年金生活だが、年金のすべてが家賃に消えてしまい、預金を切り崩して生活している。

< 80代女性 >

不況の影響もあり、25年以上営んできた商売を廃業した。何もかも使い果たし、これからどう生活していったらよいのか。

< 70代男性 >

孤独死の危機感を感じながら生きている。マンションの管理人に毎日「生きています」とあいさつするが、不安な状態である。

●必要なサービス

< 80代女性 >

週1回、昼食か夕食を提供してくれるサービスか、地域のレストランの無料チケットの配布があるとうれしい。

< 70代女性 >

娘の援助を受けているが、友人の中には子どもがいらない人も多く、いつも不安だと話している。外出もせずに部屋でテレビばかり見ている彼らを外に引き出せる読書会や茶法会のような特色のある集まりがあればよい。

< 80代女性 >

家具など重い物の移動や、高い所の掃除や電球の取替えなどのサービスがあるとよい。

< 70代女性 >

日中働いているので、地域交流館などでの区主催の高齢者対象の体操を、土日か週一回夜にやってもらいたい。

< 70代女性 >

区や都が事業主体となり、低所得者でも安心して入れる有料老人ホームを経営してほしい。同世代や単身者という同じ境遇の者が共同生活することで仲間もできるし、精神的な孤立からも免れそうだ。

Ⅱ章では意識調査結果から、設問テーマ別に単身者の特徴を分析した。
最後に、男女・年齢区分別に単身者の特徴をまとめるとともに、全体を総括する。

1. 男女・年齢区分別単身者の特徴

● 壮年前期 (35～49歳)

男性

- ① 単身者は年齢別人口の4割を超え (P4)、うち未婚は8割半ば (P5)。
回答者のうち、子どもがいる人は1割。居住期間は3年未満が3割近く、10年以上が3割半ば。民間賃貸住宅に7割超が居住。仕事をしている人は約9割で、うち非正規は1割半ば。年収300万円未満が2割半ばで、700万円以上は2割超。
- ② 新宿区への転入のきっかけは「通勤・通学」「就職など仕事」が高い。新宿区の暮らしやすさは、「交通の便の良さ」(約8割)「通勤に便利」(7割半ば)が特に高く、「買い物」「飲食店・娯楽施設」も高い。
- ③ 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に」「干渉されない」のほか「収入を自由に」も高い。困った点は、「病気時に頼れる人がいない」が約6割で最も高く、「家事が面倒」「不規則な生活」も高い。
- ④ 余暇は「家で一人」が6割近くと高い。「趣味・スポーツ」「飲み食い」をしている時の充実感が高い。
- ⑤ 夕食は「自分で調理する」は3割で、「外食」は2割半ばと高め。健康状態が「(あまり)よくない」は2割半ばで、年収300万円未満では4割近くになる。ストレスを感じるのは「仕事」「収入」の順。
- ⑥ 家族との連絡頻度は少なく、「年数回・ほとんどない」が、親は4割半ば、兄弟姉妹は7割半ばと高い。
- ⑦ 親しい友人が「いない・とても少ない」は2割半ばで、年収300万円未満では4割半ばに。
- ⑧ 近所づきあいは、「あいさつを交わす」が6割超で、「まったくつきあいはない」が3割半ば。地域の団体や集まりにも8割超が「参加していない」。今後も4割は「参加したくない」と消極的。
- ⑨ 悩みごとを相談できる相手が「いない」は約2割。要介護時に頼れる人は「親」が4割近くで、「いない・わからない」は3割を超える。年収300万円未満では5割近く、友人が少ない人は4割近くに。
- ⑩ 「結婚するつもりがない」は、年齢が上がるほど高くなり、30代後半では2割近くだが、40代後半では4割半ばに。しない理由は、「一人が気楽」「必要性を感じない」「収入面の不安」が高い。

女性

- ① 単身者は年齢別人口の3割を超え (P4)、うち未婚は8割半ば (P5)。
回答者のうち、子どもがいる人はわずか。居住期間は3年未満が3割近く、10年以上が3割を超える。民間賃貸住宅に6割超が居住。仕事をしている人は9割超で、うち非正規は3割近く。年収300万円未満が3割近くで、700万円以上は1割半ば。
- ② 新宿区への転入のきっかけは「通勤・通学」や「就職など仕事」が高い。新宿区の暮らしやすさは、「交通の便の良さ」「通勤に便利」がおよそ8割で特に高く、「買い物の便利さ」「住環境の良さ」なども高い。
- ③ 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に」「干渉されない」が高い。困った点は、「病気時に頼れる人がいない」が5割超で最も高く、「家賃・生活費が高い」も高い。「防犯への不安」が続く。
- ④ 余暇は「家で一人」が4割半ばだが、「親しい人と過ごす」も4割超。「飲み食い」「友人との交流」時の充実感が特に高く、「趣味」「旅行」「仕事」も高い。
- ⑤ 夕食は「自分で調理する」が5割半ば。健康状態が「(あまり)よくない」は1割半ばで、年収300万円未満では2割超に。ストレスを感じるのは「仕事」が最も高い。
- ⑥ 家族との連絡頻度は男性よりも高く、「週1回以上」は親が4割半ば、兄弟姉妹が約2割。
- ⑦ 親しい友人が「いない・とても少ない」は2割で、年収300万円未満では3割超に。
- ⑧ 近所づきあいは、「あいさつを交わす」が7割で、「まったくつきあいはない」が2割半ば。地域の団体や集まりにも8割半ばが「参加していない」。今後は2割半ばが「参加したい」と男性(2割)より積極的。
- ⑨ 悩みごとを相談できる相手が「いない」は1割未満と少ない。病気など要介護時に頼れる人は「親」が4割半ば、「兄弟姉妹」が4割で、「いない・わからない」は約2割と男性よりも低い。
- ⑩ 「結婚するつもりがない」は、年齢が上がるほど高くなり、30代後半では2割だが、40代後半では3割になる。しない理由は、「必要性を感じない」が最も高く、「一人が気楽」が続く。

壮年後期 (50～64歳)

男性

- ① 単身者は年齢別人口の3割半ばで (P4)、うち未婚が6割超、離別が2割近く (P5)。回答者のうち、子どもがいる人は2割超。居住期間は3年未満が1割超で、10年以上が6割半ば。民間賃貸住宅に5割半ばが居住。仕事をしている人は約7割 (50代は8割近く) で、うち非正規は3割超 (50代は2割半ば)。年収300万円未満が3割半ばで、700万円以上は2割。
- ② 新宿区への転入のきっかけは「就職など仕事」が高い。新宿区の暮らしやすさは、「交通の便の良さ」が7割半ばで特に高く、「買い物の便利さ」「通勤に便利」も高い。
- ③ 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に」「干渉されない」が高い。困った点は、「病気時に頼れる人がいない」が5割半ばと高いが、それ以外は壮年前期に比べてかなり低い。
- ④ 余暇は「家で一人」が6割近くと高い。「趣味・スポーツ」をしている時の充実感が高い。
- ⑤ 夕食は「自分で調理する」が3割半ばで、「外食」が約2割。健康状態が「(あまり)よくない」は3割超で、年収300万円未満では5割近く。ストレスを感じるのは「収入」「仕事」「健康状態」など。
- ⑥ 家族との連絡が「年数回・ほとんどない」は、親は5割近く、兄弟姉妹は6割近くで、子どもは約4割。
- ⑦ 親しい友人が「いない・とても少ない」は2割半ばで、年収300万円未満では約3割。
- ⑧ 近所づきあいは、「あいさつを交わす」が6割超で、「まったくつきあいはない」が2割超。地域の団体や集まりには8割近くが「参加していない」。今後も4割近くは「参加したくない」と消極的。
- ⑨ 悩みごとを相談できる相手が「いない」は約2割。病気など要介護時に頼れる人は「兄弟姉妹」が3割近くで、「いない・わからない」は3割半ば。友人が少ない人では4割超になる。
- ⑩ 「結婚するつもりがない」は6割近くで、その理由は、「一人が気楽」「必要性を感じない」など。

女性

- ① 単身者は年齢別人口の2割半ばで (P4)、うち未婚が6割、離別が2割を超える (P5)。回答者のうち、子どもがいる人は3割近く。居住期間は3年未満が1割超で、10年以上が7割近く。民間賃貸住宅に4割超、持ち家に4割半ば (男性は約3割) が居住。仕事をしている人は8割 (50代は8割半ば) で、うち非正規は4割近く (50代は2割半ば)。年収300万円未満が約5割と多い。
- ② 新宿区への転入のきっかけは「通勤・通学」が他よりやや高い。新宿区の暮らしやすさは、「交通の便の良さ」が7割半ばで特に高く、「通勤に便利」「買い物の便利さ」「医療機関」も高い。
- ③ 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に」「干渉されない」が高い。困った点は、「病気時に頼れる人がいない」が5割近くと高く、「重い物の移動」「家賃・生活費が高い」「家事が面倒」も高め。
- ④ 余暇は「家で一人」が6割超と高い。「飲み食い」「友人との交流」「趣味」をしている時の充実感が高く、「仕事」も男性より高い。
- ⑤ 夕食は「自分で調理する」が7割近く。健康状態が「(あまり)よくない」は2割半ばで、年収300万円未満では3割。ストレスを感じるのは「仕事」「健康状態」「収入」など。
- ⑥ 家族との連絡頻度は高く、「週1回以上」は親が約5割、兄弟姉妹が2割半ば、子どもは5割半ば。
- ⑦ 親しい友人が「いない・とても少ない」は3割近くで、年収300万円未満では3割半ば。
- ⑧ 近所づきあいは、「あいさつを交わす」が約8割、「立ち話」が5割近くと高い。地域の団体や集まりには「参加していない」が6割超。今後は「参加したい」が3割を超え、男性 (2割近く) よりも高い。
- ⑨ 悩みごとを相談できる相手が「いない」は1割超。病気など要介護時に頼れる人は「兄弟姉妹」が4割超で、「いない・わからない」は2割半ば。年収300万円未満では3割半ば、友人が少ない人は3割超になる。
- ⑩ 「結婚するつもりがない」は7割超で、その理由は、「一人が気楽」「必要性を感じない」など。

● 高齢期（65歳以上）

男性

- ① 単身者は年齢別人口の3割近くで（P4）、うち未婚が4割超、離別が2割超、死別が2割半ば（P5）。回答者のうち、子どもがいる人は3割半ば。居住期間は10年以上が8割近く。民間賃貸住宅に5割が居住。仕事をしている人は3割半ばで、年収100万円未満が2割半ば。預貯金は「まったくない」が4割超で、1,000万円以上が1割半ば。収入源は公的年金が6割近くで、生活保護が3割半ば。
- ② 新宿区への転入のきっかけは「就職など仕事」が高い。新宿区の暮らしやすさは、「交通の便の良さ」が8割半ばで特に高く、「買い物の便利さ」「医療機関」も高い。
- ③ 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に」「干渉されない」が高い。困った点は、「病気時に頼れる人がいない」が5割で高く、「特にない」が2割半ばになる。
- ④ 充実感は、「テレビ」が約4割で最も高く、「飲み食い」「趣味」「友人との交流」が続く。「特にない」が2割近くと他の区分より高い。
- ⑤ 夕食は「自分で調理する」が5割超で、壮年期男性より高い。健康状態が「（あまり）よくない」は3割超で、ストレスを感じるのは「健康状態」が特に高く、次いで「収入」。
- ⑥ 家族との連絡頻度は少なく、「年数回・ほとんどない」が、兄弟姉妹とは6割超、子どもとは約4割と高い。特に離別した男性は7割を超え（死別は1割半ば）、うち「ほとんどなし」が5割。
- ⑦ 特に親しい友人が「いない・とても少ない」は4割と他の区分より高い。
- ⑧ 近所づきあいは、「あいさつを交わす」が6割半ばで、「立ち話」も高く、「まったくつきあいはない」は1割半ば。地域の団体や集まりに「参加していない」は7割近くで、今後も「参加したくない」は4割半ば。
- ⑨ 悩みごとを相談できる相手が「いない」は2割半ばと他の区分よりも高い。病気など要介護時に頼れる人は、最も高いのが「ヘルパーなど」の1割半ばで、「いない・わからない」は4割近くと高い。「子どもがいない人・連絡がない」人では5割近くになる。
- ⑩ ほぼ毎日外出する人は、65～74歳で約5割、75歳以上で約4割と女性よりも高い。

女性

- ① 単身者は年齢別人口の4割で（P4）、うち未婚が3割近く、離別が1割半ば、死別が5割半ば（P5）。回答者のうち、子どもがいる人は4割半ば。居住期間は10年以上が9割近く。持ち家に6割近くが居住。仕事をしている人は2割半ばで、年収100万円未満が2割超。預貯金は「まったくない」が2割近くで、1,000万円以上が3割。収入源は公的年金が8割近くで、生活保護は1割未満。
- ② 新宿区への転入のきっかけは「結婚・離婚・死別」が最も高い。新宿区の暮らしやすさは、「交通の便の良さ」が9割近くで特に高く、「買い物の便利さ」「医療機関」も高い。
- ③ 一人暮らしの良い点は、「時間を自由に」「干渉されない」が高い。困った点は、「重い物の移動」が4割超で、「病気時に頼れる人がいない」（4割超）も高い。
- ④ 充実感は、「友人との交流」が5割半ばで最も高く、「テレビ」「飲み食い」「趣味」が続く、「旅行」「買い物」「家族団らん」も3割前後で、多くのことに充実感を感じている。
- ⑤ 夕食は「自分で調理する」が7割。健康状態が「（あまり）よくない」は2割半ば、ストレスを感じるのは「健康状態」が特に高く、次いで「収入」。
- ⑥ 家族との連絡頻度は高く、「週1回以上」は兄弟姉妹とは2割半ば。子どもとは7割を超え、うち「ほぼ毎日」は4割超。子どもの居住地も近く、4割近くが「新宿区内」。
- ⑦ 親しい友人は「いない・とても少ない」は2割で、「とても多い・多い」が4割超と他の区分より高い。
- ⑧ 近所づきあいは、「あいさつを交わす」「立ち話」が高く、「物をやりとり」「一緒に食事」「葬儀など」も高め。地域の団体や集まりには比較的参加しており、「参加していない」は5割近くと他の区分より低い。
- ⑨ 悩みごとを相談できる相手は「兄弟姉妹」「子ども」など多い。病気など要介護時に頼れる人は「子ども」が3割超で、「いない・わからない」は約2割。「子どもがいない人・連絡がない」人では3割半ばに。
- ⑩ 75歳以上の外出頻度は、「ほぼ毎日」「週1回・しない・できない」が各3割近く。

2. おわりに — 分析を通して —

(1) 単身化の最近の状況

新宿区は単身世帯の割合が全国で最も高く（諸島部を除く／2010年国勢調査）、今後も増加することが見込まれる（I章図1）。では、最近の単身化の状況はどうなのだろうか。表1は過去3年間の1月1日現在の住民基本台帳人口の一人世帯の数（単身者数）と総人口に対する割合（単身者割合）、そして60歳以上の一人世帯の60歳以上人口に対する割合（60歳以上単身者割合）¹⁾を示している。それぞれ毎年、着実に上がっていることがわかる。

●表1 住民基本台帳人口による単身者数・割合

	2013年	2014年	2015年
単身者数	128,056人	130,619人	133,721人
単身者割合	39.9%	40.3%	40.8%
60歳以上単身者割合	37.7%	38.1%	38.5%

一方、本年度の人口移動に関する調査研究²⁾から、新宿区の転入数・転出数は10歳代後半から30歳代に集中していることがわかった。また、I章図6から、新宿区の単身者のうち、10年以上居住している人の割合は、若年期では約3%と極めて低いが、壮年前期では3割近く、壮年後期では6割近く、高齢期では8割超と、年齢区分が上がるほど定住性が高まることが明らかになった。

(2) 新宿区に単身者が多い理由

事業所や商業施設が集積し、昼間人口が多く、人口密度も高い新宿区は、地価が高く、家賃も高い。そうした新宿区になぜ多くの単身者が集まり、住み続けているのだろうか。

昨今、若い世代が地方圏から出生率の低い東京圏へ過度に流入する、いわゆる「東京一極集中」が人口減少問題の一つとして指摘されている。若年層の東京圏への流入は、進学や就職を契機とするものが多いが、新宿区は、事業所や大学も多く、交通網も発達している。新宿駅を中心に、山手線、中央線、埼京線などのJRや、西武新宿線、小田急線、京王線などの私鉄、都営新宿線、都営大江戸線、丸ノ内線、副都心線などの地下鉄や路線バスが区内を縦横無尽に走っている。新宿区内や都内に通勤・通学す

るうえで非常に利便性が高いといえる。また、百貨店やスーパー、コンビニなどの商業施設や飲食店・娯楽施設が多く、大学病院などの医療機関も充実している。住環境も良く、他人からの干渉が少ないなど、新宿区は若年期から高齢期まで、単身者が日常生活を送るのにも、余暇を楽しむのにもとても便利なまちであることが意識調査結果からわかった。

家賃が高く、部屋が狭いことを不満に感じつつも、こうした「利便性の高さ」を重視して、多くの人が新宿区で一人暮らしを続けていることが推測される。

(3) 単身生活の課題

意識調査結果によると、一人暮らしの良いところとして、「時間を自由に使える」「他人に干渉されない」「友人・知人と自由に交際できる」などを男女・年齢を問わず多くの人が挙げている。

一方、一人暮らしの困ったところとして、「人との会話が少なくなる」「家事をするのが面倒になる」「不規則な生活習慣から抜け出せなくなる」などを挙げる人が多かった。また、将来の生活や収入への不安、孤独死への不安を感じている人も多い。そして、何より一人暮らしで最も困ることは、「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」ことである。意識調査でも男女、年齢を問わず多くの人が挙げていた。

(4) 高齢期の単身者の課題

では、こうした困った状況を抱えやすい単身者には何か共通点があるのだろうか。まず、加齢により病気や介護のリスクが高まる高齢期の単身者の孤立化の問題について考察することとし、その特徴をつかむため、男女別に分析したところ、次の特徴がみられた。

- 男性は女性より、①公的年金などの収入源や預貯金が少なく、生活保護が多い
- ②民間賃貸住宅に住む人が多く、家賃や居住継続への不安が大きい
- ③「友人との交流」などに充実感を感じる割合が低い
- ④子どもや兄弟・姉妹との連絡頻度が少ない
- ⑤親しい友人・知人が少ない
- ⑥近所づきあいが少ない
- ⑦悩みごとを相談できる相手や病気や要介護時に頼れる人が少ない

1) 住民基本台帳データから得られる年齢別世帯数は10歳別で示されているため60歳以上で算出している。
2) 新宿区新宿自治創造研究所(2015)「研究所レポート2014 No.1「新宿区の人口移動」

こうした男女による違いの理由は、女性の方が社会的であるからとも言われるが、高齢期の単身女性の半数以上が死別であることが大きな要因として考えられる。女性は男性より長寿であるため、夫が先に亡くなり一人暮らしになるケースが多い。そのため、長い期間、子どもなど家族とともに地域社会の中で生活し、友人や近所との交流を続けてきた人が多いと推測される。意識調査結果から、子どもが近くに住み、頻りに連絡をとっている女性が多いことがわかる。これまで築いてきた人づきあいも豊かで、いざという時に支援をしてくれる人は少なくない。

一方、高齢期の男性も子どもがいる人は多いが、離別した男性は子どもとの縁が弱くなってしまったり、子どもと頻りに連絡をとっている割合が低い。現役時代に仕事中心の生活であったため、近所や友人と新たな関係をつくるのが得意ではないと思われる。

意識調査結果の分析から、将来、孤立化などの問題を抱える可能性が高い人は、男女を問わず、**自立生活度**（健康状態、年収・預貯金、住宅、仕事等）が低い人、**人とのつながり度**（子どもや友人など困ったときに助けてくれる人の有無）が低い人、にまとめることができる。

（5）壮年期の単身者の課題

次に、やがて高齢期を迎える壮年期の単身者の孤立化の問題について考察する。表2は50歳時の未婚率である生涯未婚率³⁾の推移を示している。男女ともこの20年間で大幅に上昇していることがわかる。

50歳時の未婚率が高いということは、その年代は子どもがいない割合も高い。今の75歳前後の生涯未婚率（表：1990年）は男女とも1割半ばだったが、55歳前後（同：2010年）では、男性の3人に1人、女性の4人に1人が未婚である。未婚率は今後とも高くなることが予想され、今後、未婚のまま子どもがなく、高齢期を迎える単身者が増えていくことが想定される。

●表2 新宿区の生涯未婚率(国勢調査)

	1990年	2000年	2010年
男性	14.2%	24.3%	33.3%
女性	16.1%	18.1%	27.3%

3) 45～49歳と50～54歳の未婚率の平均値

こうした視点を踏まえ、壮年期の単身者の**自立生活度**をみるため、意識調査結果から年収300万円を区分とするクロス分析を行った。その結果、**年収が少ない人は①健康状態がよくない ②親しい友人が少ない ③結婚の意向が低い（壮年前期男性）**といった傾向があることがわかった。

また、**人とのつながり度**をみるため、「病気時に世話をしてくれる人」が「いない・わからない」人の割合をクロス分析した。その結果、**①年収が低い人 ②子どものいない・連絡がない人 ③友人がいない・少ない人は、病気・介護時に世話をしてくれる人が少ない傾向にある**ことがわかった。

生活や住宅に困窮し、困ったときに頼れる人がいないという高齢期の単身者は少なくない。今後、壮年期の単身者が高齢期を迎えることで、支援を必要とする人がさらに増えてくることが予想される。

（6）来年度（平成27年度）に向けて

意識調査結果の分析を通して新宿区で暮らす単身者の多くの特徴が明らかになった。今年度は35歳から90歳までの男女106人の単身者に対するヒアリング調査も実施した。生活スタイルや抱えている課題も多種多様であり、アンケート調査だけでは知ることのできない個々の単身者の暮らしぶり、悩みごとや困りごと、価値観や考え方をうかがうことができた。

来年度は、本レポートで示した研究成果をベースに、意識調査結果のさらなるクロス分析を行うとともに、ヒアリング調査結果を基にタイプ別の課題分析を行い、今後の新たな施策の方向性を示していきたい。

既刊一覧

◎2008（平成20）年度 新宿自治創造研究所活動報告書	2009（平成21）年3月
◎2009（平成21）年度 新宿自治創造研究所活動報告書	2010（平成22）年3月
◎都市・自治にかかる情報と分析—データの読み方—	2010（平成22）年3月
◎研究所レポート2010 外国人WG報告（1）	2010（平成22）年12月
◎研究所レポート2010 人口WG報告（1）	2011（平成23）年2月
◎研究所レポート2010 集合住宅WG報告（1）	2011（平成23）年3月
◎研究所レポート2011 集合住宅WG報告（2）	2011（平成23）年11月
◎研究所レポート2011 外国人WG報告（2）	2011（平成23）年11月
◎研究所レポート2011 集合住宅WG報告（3）	2012（平成24）年1月
◎研究所レポート2011 外国人WG報告（3）	2012（平成24）年1月
◎研究所レポート2011 人口WG報告（2）	2012（平成24）年3月
◎研究所レポート2011 人口WG報告（3）	2012（平成24）年3月
◎研究所レポート2012 No.1 国勢調査データからみる新宿区の特徴	2013（平成25）年3月
◎研究所レポート2012 No.2 国勢調査に基づく新宿区将来人口推計 — 将来の住宅供給を考慮したコーホート・シェア延長法による —	2013（平成25）年3月
◎研究所レポート2013 No.1 国勢調査に基づく新宿区将来人口推計 — 地域別推計 —	2014（平成26）年1月
◎研究所レポート2013 No.2 国勢調査に基づく新宿区将来世帯推計	2014（平成26）年3月
◎研究所レポート2013 No.3 新宿区の単身世帯の特徴 — 壮年期を中心として —	2014（平成26）年3月
◎研究所レポート2014 No.1 新宿区の人口移動	2015（平成27）年3月

研究体制

所 長	金安 岩男	（慶應義塾大学名誉教授）
副 所 長	平井 光雄	（新宿自治創造研究所担当課長）
政策形成アドバイザー	牧瀬 稔	（一般財団法人地域開発研究所主任研究員）
テーマ別アドバイザー	宮本 みち子	（放送大学教授）
”	大江 守之	（慶應義塾大学教授）
研 究 員	田中 雅美	
”	岸田 瞳	
非 常 勤 研 究 員	栗田 健一	
”	丸山 洋平	

研究所レポート2014 No.2 新宿区の単身世帯の特徴（2） — 単身世帯意識調査結果から —

発行年月	2015（平成27）年3月
編集・発行	新宿区新宿自治創造研究所 （新宿区新宿自治創造研究所担当部 新宿自治創造研究所担当課）
住 所	〒160-8484 東京都新宿区歌舞伎町一丁目4番1号 （新宿区役所内）
電 話	03-5273-4252（直通）
F A X	03-5272-5500
E-Mail	jichisozo@city.shinjuku.lg.jp

新宿区新宿自治創造研究所

印刷物作成番号

2014-3-2201

再生紙を使用しています。



新宿区はグリーン電力証書システムに参加し、使用電力のうち年間100万kWhを、自然エネルギーから作られたグリーン電力でまかっています。